

---

# ウルトラマンレオ

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウルトラマンレオ

### 【Nコード】

N0944P

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

ウルトラマンレオの故郷、獅子座L77星の物語。

## 1・連れ去られた弟

獅子座にある美しい惑星、L77星。

今、この星に巨大隕石が接近していた。

隕石は大気圏に突入すると炎を纏って森へと墜落した。

「うわあっ！」

隕石が真つ二つになり、中からマグマ星人が飛び出した。

「くそ！ また着地に失敗かよ！ しかも今度は大破ときた！」

そう……、隕石は宇宙船だったのだ。

「あ？」

その時、遙か彼方から赤い巨人が飛んできた。

巨人の腹部には「i6868—671」というシークレットサインが描かれており、頭部はライオンの鬚たてがみを彷彿させていた。

彼の名はウルトラマンアルス。この星の王様である。

「何者だア？」

「我が名はアルス！ 異星人よ、この星から出て行け！」

「ちっ！ 面倒な奴だぜ」

マグマ星人はウルトラマンアルスに襲いかかった。

ウルトラマンアルスは迫り来るサーベルを剣で受け止め、そのまま押し返した。

「父上！」

そこにやってきたのは、ウルトラマンアルスの息子、レオだった。

「父さん！」

続けてレオの双子の弟、アストラも現れた。

「ほおう」

星人は足下の二人に気付くと、ウルトラマンアルスを蹴り飛ばし、アストラを人質に取った。

「アルスよ、大人しく剣を放せ。さもなければこいつの命がねえぜ」

「くっ……」

仕方なく剣を下ろすウルトラマンアルス。

「今だ！」

星人はサーベルをウルトラマンアルスの足に突き刺した。

「うわあ！ ぐっ！」

「父上！」

「レオ、逃げるんだ！」

「しかし父上！」

「私の事は放っておけ！ アストラは私が助け出す！」

レオはウルトラマンアルスの言葉に甘えて逃げ出そうとした。

「待て」

そんな彼の前にドリュウが現れた。

「これを」

ドリュウは箱を取り出して開けた。中には獅子を象った指輪が入っていた。

「まさか俺に？」

「嫌か？」

レオは生唾をゴクリと飲み込み、指輪を左手薬指にはめた。

「うわ！ 何だこれは！？」

「力に飲み込まれるな」

「うわああああ！」

「叫べ、レオ！」

「レオ ツ！」

レオは叫ぶと同時に赤い巨人に変身した。

名はウルトラマンレオ。腹部には「i3963—671<というシークレットサインが描かれている。

「異星人、アストラを返せ！」

「嫌だね」

星人はレオにビームを放った。

「ぐわあ！」

レオはまともに受け地に伏した。

「雑魚は引っ込んでろ」

「くっ……」

何とか起き上がるレオ。

「ほう、まだそんな力が」

「返せ、アストラを！」

「嫌だね」

「兄さん！ 助けて！」

「ではさらばだ」

星人はアストラを連れて立ち去った。

「アストラ ツ！」

「ぐっ！」

膝を着くウルトラマンアルス。

「父上！」

ウルトラマンレオはウルトラマンアルスに肩を貸した。

「立てますか？」

「うむ。いったん引こう」

二人は城へと飛び立った。

## 1・連れ去られた弟（後書き）

連れ去られたアストラ。レオは彼を救い出せるのか！？

## 2・特訓

Ｌ７７星の王宮の一室にレオは居た。

「アストラ……」

レオの脳裏に弟、アストラの顔が過よぎる。

（絶対助けてやるからな）

と、心に決めた刹那、ドリユーが部屋に入ってきた。

「ドリユーか」

「レオ王子、アルス王が呼んでいる」

「父上が？」

何だろう、そう思いながら王室へ向かうレオ。

「父上、お呼びでしょうか？」

「ああ。もうじき、星人がやってくるであろう。星人はアストラを人質にする筈。レオ、アストラを助け出すぞ」

「はい！」

「うむ。レオ、戦闘の準備をしておけ」

「はい」

レオは返事をするや部屋に戻った。

Ｌ７７星付近。マグマ星人の艦隊がやってきていた。

「収縮光子砲の準備だ！」

「収縮光子砲チャージ開始！」

「敵は二人だ。纏めて吹っ飛ばしてやる」

その時、Ｌ７７星から二人のウルトラマンがやってきた。アルス王とレオだ。

「収縮光子砲はまだか！？」

「もう少しです！」

「早くしろ！」

「マグマ星人、アストラを返せ！」

レオが言うのと艦隊から筒が出て来た。その中にはアストラが閉じこめられていた。

「動くな！ 動くといいつの命は無い！」

「くっ……！ 父上、どうしましょう？」

「様子を見るんだ」

「収縮光子砲チャージ完了！」

「よし、撃て　っ！」

その言葉の直後、艦隊から収縮光子砲が放たれた。

「レオ！」

アルスがレオを庇い、収縮光子砲の直撃を受けた。

「うわああああ　っ！」

「父上！」

「レオ、後は頼んだぞ……」

アルスはそう言い残して消滅した。

「父上　っ！」

レオは艦隊を睨め付けた。

「許さんぞ、マグマ星人！」

艦隊へと突進するレオ。アストラが閉じこめられている筒を取り上げ、艦隊を蹴り飛ばした。

「退却だ！」

逃げる艦隊。

「待て！」

レオは手を伸ばしたが、艦隊は去っていった。

城の裏にある岩場。

レオは特訓をしていた。

「いやあ！ ええい！」

岩を足で叩き割るレオ。



「レオ王子」

「ああ、ドリユー」

「特訓の方はどうだ？」

ドリユーは砕かれた岩を見た。

「上出来だ。これなら奴らを倒せる。レオ王子、戦いの準備を」

ドリユーはそう言々と走り去っていった。

「おい、待ってくれ！」

レオはドリユーの後を追って城内に入った。

### 3・L77星の危機

城内に戻ると、なにやら騒がしかった。

「何が遭ったんだ？」

兵士に訊ねるレオ。

「マグマ星人が襲撃してきたんです！」

「何だって！？」

レオは慌てて城外に飛び出した。

城外ではドリユーがウルトラマンに変身してマグマ星人と戦っていた。

「ドリユー！」

「レオ王子！」

「星人は俺がやる！」

レオは腕をX字に交差させ、大きく広げて左手拳を前に突き出した。

「レオ　ッ！」

すると獅子の瞳が輝き、レオはウルトラマンレオへと変身を遂げた。

「では私は住民の避難を」

ドリユーは人間態になると去っていった。

「さあ来い！　俺が相手だ、マグマ星人！」

「いいだろう」

星人はレオに攻撃を仕掛けた。

星人のサーベルがレオを襲う。

レオはバックステップでかわすと、光球を星人に投げつけた。ひらりと身をかわす星人。

「そんなもの当たらんわ！」

「それはどうかな？」

「何？」

星人の背中に光球が当たった。

「ぐはっ！ ホーミングだと！？」

「とっととくたばれ！」

レオは空高く飛び上がり、レオキックを放った。

「うわああああ！」

星人はレオキックをまともに食らって爆裂霧散した。

「まだまだ居るぞ！」

と、背後から襲いかかってくる別のマグマ星人。

レオは振り返り様にカウンターを浴びせた。

「ぐふっ！」

怯む星人。

「何をやっている！？」

と、そこに現れたのはマグマ星人の総統だ。

「総統！」

金色の長髪に仮面を着けた総統は言う。

「そこのお前、名は？」

「俺はウルトラマンレオだ」

「ウルトラマンレオ……か。覚えておこつ」

さて と続ける総統。

「私がお前の相手をしてやる」

レオは無言で身構えた。

「行くぞ！」

レオへ襲いかかる総統。

レオはバク転で間合いを空け、光球を総統に投げつけた。

総統は光球を相殺。

「そんなものでどうしようというのだ？」

「くっ……！」

「次は私の番だ」

総統はサーベルでレオを突いた。

「うぐっ！」

怯むレオ。

「レオ兄さん！」

と、そこに現れたのはレオの双子の弟、アストラ。

アストラはレオリングと同じ形をした指輪を使ってウルトラマンに変身した。

赤き体に> i 3 9 6 4 — 6 7 1 <という文字が腹部に描かれた姿

になったアストラは総統に体当たりをした。

「うおっ!?!」

蹠<sup>よろ</sup>跟めく総統。

「兄さん、手を貸すよ」

「アストラ。……よし、二人で敵を倒そう」

「うん」

二人はそれぞれ敵に攻撃を仕掛けた。

「うぐっ!」

怯む総統。

「貴様ら、俺を忘れるな!」

と、星人が割り込んできた。

星人はサーベルでアストラを襲う。

「うわっ!」

何とか回避するアストラ。

「貴様!」

レオは星人を蹴り倒した。

「貴様の相手は私だ!」

総統はいきり立ってレオに襲いかかった。

レオは地面を蹴って飛び上がり攻撃をかわすと、そのままレオキックを総統に放った。

総統はレオキックの直撃を受けて爆裂霧散した。

「総統!」

「次は貴様の番だ!」

「くそっ……!」

星人は地中へと逃げた。

「待て！」

後を追うレオ。

星人はマグマに近付くと振り返って腹部のマグマ勲章を指差した。

「これが何か分かるか？ これは起爆装置だ」

星人はマグマへと飛び込んだ。

激しく揺れる大地。

大噴火する火山。

レオは慌てて地上へと戻った。

「アストラ、もうすぐ星が爆発する！」

「何だって！？」

「住民を宇宙船で脱出させるんだ！」

「分かった！」

「俺はドリューに知らせてくる！」

レオはそう言う人と人間態に戻って城へ入った。

#### 4・セブンが死ぬ時！東京は沈没する！

城南スポーツクラブ。今、一人の若い男が技を披露していた。彼はおひとり ゲン、二十歳。

この城南スポーツクラブでインストラクターをやっている。

今、ウルトラセブンは東京の南二百五十キロの洋上、黒潮島で宇宙からやって来た双子怪獣と戦っている。

セブンは単身、地球を守る任務を帯びて地球に来ていたのだ。

怪獣は肩を組み、物凄い勢いで回転し始めた。

セブンは立ち向かうがはじかれてしまう。

さらに怪獣はそのまま光線まで出してセブンに襲い掛かる。

セブンの必殺の超兵器、アイ・スラッガーですら、スピンの前には跳ね返されてしまう。

セブンのとどめを刺そうと襲い掛かる双子怪獣。

それに追い打ちをかけるようにマグマ星人が現れ、サーベルでセブンを追い詰める。

悪賢いマグマ星人は双子怪獣を使って、セブンを襲ってきた。倒れこんだセブンの足をブラックギラスが掴んで捻じ曲げる。

セブンの足は嫌な音を立てて折れていった。

その時、彼方から赤い炎をまとってウルトラマンレオが現れた。

レオは、マグマ星人にレオキックを食らわした。

故郷を滅ぼされた怒りに燃えるレオはマグマ星人を追い詰める。

マグマ星人は指笛を吹いて、双子怪獣にレオを倒すように指令を出す。セブンがそれを許さない。

レオの格闘に追い詰められたマグマ星人はサーベルからビームを発射した。

ビームが炸裂したセブンは倒れこむ。

そして、マグマ星人は稲光と共に消え去り、双子怪獣は海の底に沈んでいった。

レオは変身を解くと倒れているセブン……いや、変身の解けたモロボシ ダンの元に走りよった。

「モロボシさん！ 大丈夫ですか！？ しっかりして下さい！」

海岸に二人の男がいた。

ウルトラセブンことモロボシ ダン、そしてウルトラマンレオとおおとり ゲンである。

「私をモロボシダンと知って助けてくれたのか？」

「あなたはウルトラセブンです！ 地球の宇宙パトロール隊MACの隊長であることも知ってます！」

「君は一体誰だ？」

「ウルトラマンレオです！」

「ウルトラマンレオ……」

「僕の故郷は、あの獅子座です」

空を指さすゲン。

「一ヶ月前まであの獅子座には、もう一つの星がありました。この地球のように美しい自然に恵まれた、L77星です。ところが、凶悪なマグマ星人にL77星は全滅させられてしまいました。父、母、そして兄弟……それから僕は故郷にそっくりの星、地球で生きようと決心しました」

指を下ろすと、ゲンはダンに向き直る。

「地球は僕の第二の故郷です。おおとり ゲンと名乗って平和に暮らして来たのに……またマグマ星人がやってきた！」

「ゲン……君は愛する地球を、君自身の手で守るんだ」

「愛する地球を僕自身の手で……？」

「宇宙パトロール隊に入隊するんだ！」

「だってモロボシさん、あなたがいるじゃないですか」

「私には君が必要だ。しかも、君にも私が必要だ！」

「しかし、ウルトラセブンがいるではありませんか！」

ダンにはゲンに向き直る。ブラックギラスに折られた右足は包帯で応急処置がしてあるが、しかし、包帯からは血がにじんでいた。

「……セブンはもういない」

「何ですって!？」

ダンにはウルトラアイを取り出して装着しようとした。

「デユワ！」

しかし、ウルトラアイは火を噴いて溶けてしまった。

倒れこむダン。

「セブン! ……モロボシさん! 大丈夫ですか!？」

「やってくれるな? ……やって、くれるな?」

「はい!」

ダンには地平線の彼方を指さす。そこにはすでに夕日が沈もうとしていた。

「あそこに沈む夕日が私なら、明日の朝日はウルトラマンレオ、お前だ!」

「やらせて下さい!」

固く握手をかわす二人。次の瞬間。

「でやあああつ!」

「うわあああつ!」

ゲンをいきなり放り投げるダン。

「何をするんですか!？」

ダンの手に握られていたのはゲンの上着だった。

「どんな時でも油断は禁物だ! 分かったな?」

そうやってダンにはゲンに上着を放る。

「はい!」

かくて、二人の宇宙人が地球を守るため、心を一つにして戦う事になった。

夕日をバックに向き合う二人。



宇宙に浮かぶMAC基地。通称マックと呼ばれる宇宙パトロール隊の本部は、この巨大な宇宙ステーションの中である。

MACは宇宙からの侵略や遠く宇宙へ旅する宇宙船の安全を守るために作られた国際的な組織である。

基地内では宇宙パトロール隊の隊員の他、白衣の科学者や黄色い服の作業員もいる。

ドアからダンとゲンが入ってくる。

「みんな、集まれ」

ダンの前に集まる宇宙パトロール隊の隊員。

「新隊員を紹介する。おおとり ゲン隊員だ」

「おおとりです！ よろしくお願ひします！」

「それじゃ、隊員を紹介しよう」

「黒田です、よろしく」

「青島です」

「赤石です」

「白川です」

「桃井です、よろしくお願ひします」

「よろしく！」

一緒に戦う仲間が出来たのが嬉しいのか、ゲンは笑顔だ。

城南スポーツクラブ。

ゲンはマックロディーに乗ってMAC入隊の報告に来ていた。

「いやあ、おめでとうおめでとう！ この大村 正司嬉しいぞ！」

スポーツセンターの主事の大村さんも喜びを隠し切れない様子。

「とにかくスポーツクラブからMACの隊員が誕生したとなると、子供達もおおとり君を目指して今まで以上、スポーツにも勉強にも身が入るだろうなあ」

「いやあ、子供達ばかりじゃありませんよ。僕だっておおとりさんの後を追ってMACに入ろうと思ってるくらいです」

「ああ、野村さん困るわ。皆MACへ入ってしまったら、スポーツクラブの方はどうなるの？」

「そりゃそうだ、ももちゃんの言う通りだ。みんなMACにいつちやったら困るな」

「おおとりさん、スポーツクラブをやめちゃうの？」

「ん？ カオルちゃん、心配することないんだよ。MACの仕事がない時はね、スポーツクラブにいてもいいことになってるんだ」

「本当？ ああよかった！ また宿題を教えてもらえるのね？」

それを聞いて笑うゲンと百子。

「えっ？ おおとり君はカオルちゃんの宿題をみたのか」

カオルに向かって言う大村。

「ここはスポーツクラブなんだよ？」

「大村さん、ご存知なかったんですか？ カオルちゃんばかりじゃありませんのよ？」

「本当？ おい、おおとり君に宿題をみてもらったことのある者は手をあげてー！」

みんな手を上げる。それには大村も呆然である。

## ゲンの部屋。

シャワーを浴び終えたゲンが部屋に戻るとカオルがギターを弾いていた。

「ああー、さっぱりした。あっ、何だカオルちゃん、来てたのか」

「お花持ってきてあげたのよ、綺麗でしょ？」

「うわあ、本当に綺麗だ、どうもありがとう」

チューリップの歌を歌う二人。

それから二人は外に出かけた。

しりとりをしたり、風船片手に手をつないだり、公園で遊んだり

……さながらその様子は仲のいい兄妹のようだ。

部屋に帰ってきたゲンの腕のマックシーバーが鳴り響く。

「こちらゲン！」

「緊急指令、ただちに本部へ直行せよ！」

「了解！」

黒潮島は双子怪獣が起こす津波に襲われていた。

MAC本部。

「隊長！ 大津島からSOSです！」

「何だつて！？」

「沈むとだけしか聞き取れません」

「続けて発信機で呼ぶんだ！」

「はい！」

地図を見る隊員達。ダン、黒田、青島。

「今度は東京から百五十キロか……だんだん東京から近づいてる…

…」

駆けつけたゲンが言う。

「マグマ星人だ！ あいつがやったんだ！」

「おおとり、口をつつしめ！ お前にどうしてそんなことがわかるんだ？」

「それは……」

「怪獣に対しては我々の方が先輩なんだぞ？」

「しかしですね……」

「よせ！ たとえ万に一つのことでも調べるのが我々MACの任務だ！ マッキー1号で行け！」

「「はい！」」

「おおとり隊員、君も行け！」

「はい！」

マッキー1号がMAC基地から飛び立つ。

沈没した黒潮島を見て黒田隊員は言う。

「五百三十メートルの山頂が顔を出しているだけということは五百メートルも沈んだということだ。マグマ星人の力とは思えないけどねえ、おおとり君」

「……………」

ゲンは宇宙人として発達した眼力で、海の中に怪獣の気配を感じ取る。

「赤石、レーダー反応はどうだ？」

「動きは全く見られません」

「おおとり、納得がいったか？」

「もう一度島の上空を飛んで下さい！ 赤石隊員！ 谷間に隠れているかもしれません！ 注意して下さい！」

赤石「了解！」

マッキー1号は谷間へと移動する。

「谷間の上空だ。赤石、何か見えるか？」

「いえ、反応ありません」

「赤石隊員！ もう一度よく見て下さい！」

「反応無し」

黒田は上から通信機を伸ばしてきてMAC本部に連絡を取る。

「こちらマッキー1号、本部基地どうぞ」

「こちらMAC本部、どうぞ」

「大津島には異常ありません。ただ今より、基地に向かいます」

「了解」

「……………」

MAC基地。

「隊長！ あれは確かにマグマ星人の仕業です！」

「そうかもしれん。しかしリーダーには何の反応もなかった」

「この目で見ました！ 明らかに奴の狙いは東京です！ 今頃、東京が襲われ沈没させられてしまします！」

ダンはボタンを押す。すると丸い窓が開き、そこから地球が見えた。

「隊長！ 僕の言う言葉が信じられないんですか！？」

「きけ。お前も私も確かに宇宙人だ。だが、忘れてはならない事がある。それは……二人とも人間として、あの地球にいるという事だ」「愛する地球を自分の手で守れと言ったのは、あなたじゃありませんか！ 人間だの宇宙人だの言ってる場合じゃありません！」

「違う！ 人間の世界では人間のやり方でやらなければならない」

「そんなやり方では東京は沈没させられてしまします！ ……あなたは故郷を奪われた者の心を知らない」

「ゲン、私にとっても地球は故郷だ」

「バカな！ もうすぐ東京は沈むというのに！ もう時間があります！ ……」

行こうとするゲンを止めるダン。

「よせ！ お前一人の力では奴らには勝てはせん」

「隊長！ ……勝手にします！」

「ゲン！」

ダンはゲンを杖で止める。視線をかわしあう二人。そこに桃井隊員が来る。

「隊長！ 東京湾が異常上位です！」

「なに！？」

津波によって橋は壊され、人々は逃げまどい、双子怪獣は暴れまわっていた。

スポーツクラブの面々も避難している。ゲンはただ一人、怪獣に向かっていく。

「おとりさん！」

ゲンは怪獣の前まで来ると、飛び上がって両腕を空に向かって広げた。

「レオ ツ！」

指のレオリングが光り、変身する！

登場しざまにキックで双子怪獣を倒すレオ。

しかし、怪獣は起き上がりレオを挟むと高速でスピンのたのたの。すごいエネルギーにさらされ、目も回ったのも手伝ったのか、倒れるレオ。

ダンはゲンを追ってきて、浜辺でその様子を見ていた。

「ダメだ……ウルトラマンレオが負ける……。日本は沈没する！」

怪獣は角から赤い光線を出して街を破壊する。

カラータイマーが赤く点滅しているレオが何とか立ち上がるが、一方的にやられてしまい……。

## 5・大沈没！日本列島最後の日

レオは双子怪獣相手に奮闘する。

街では助けを求める悲鳴が響く中、スポーツクラブの面々が逃げていた。

だがカオルが瓦礫に躓いたのか転んでしまう。

「お姉ちゃんー！」

「カオルちゃん！」

百子はすぐさまカオルを抱き起こす。だが、その時。

「きゃああああっ！」

双子怪獣が壊したビルの上の自動車が落ちてきて、カオルをかばった百子は潰されてしまう。

大ピンチのレオの元にととう稲光と共にマグマ星人が現れる。

そして、サーベルから光線を出し、双子怪獣に指令を与えた。

双子怪獣はまたしても組み合って回転し始めた。

（しまった……！ギラスズピンだ！）

と、ダン。

レオはスピンを止めようとするが効果が無く、マグマ星人のサーベルにも狙われ大ピンチだ。

ダンは手を身体の前で交差させ、ウルトラ念力を発動させる。

「ジユワ！」

ダンは変身出来ないセブンに残された最後の武器、ウルトラ念力を使った。

だが神経を集中させてエネルギーを使うこの念力はモロボシダンの命を著しく縮めるのだ。

念力の効果で苦しんでいる怪獣達にレオは攻撃を加える。そしてギラス兄弟の角を折る事に成功した。

マグマ星人は稲光とともに、双子怪獣は黄色い煙幕をはいて逃げていった。

念力使用の副作用で倒れたダンに走り寄るゲン。

「隊長　っ！」

「……ゲン、お前は何故私の忠告を無視して戦った!？」

「しかし、僕は勝ちました！」

「お前は、自分の星が全滅させられた憎しみだけで星人と戦ったのではないか？」

「それがいけないんですか!？」

「バカヤロ　ッ！」

「隊長!？」

「触るな！」

ゲンを振り払うダン。

「お前に……この足の痛みがわかるか……お前は命を失うところだったんだぞ」

「僕が命を？」

「お前一人の力で星人を追い返したと思っているのか？」

「何ですって?　……それじゃ、あの時隊長が！」

「言うな！」

「隊長が僕を助けてくれたんですね!？」

「うるさい!　お前は、自分が守らねばならぬ地球人を巻き添えにしたんだ……お前の隣人をな……百子さんは今、病院で生死の境をさまよっている。今度奴らが現れた時、我々が守りきれなかったら……日本は沈没する！」

病院。

重体で意識の戻らない百子。それを見守る大村、猛、カオル。

駆けつけたゲンに大村は言う。

「百子ちゃんね、怪獣に向かっていく君の事をとても心配してい



た」

「繰り返し、おとりさんの名前を呼んでいました」

泣き出すカオル。ゲンは悲痛な面持ちで百子を見つめるのであった。

悔しさのあまり、林の中で木を蹴り倒したりして暴れまわるゲン。そこにダンが現れる。

「ゲン！ そんな技で双子怪獣を倒す事は出来ん！ ……悲しいか？」

「くやしい！」

「星人の逆襲はもはや時間の問題だ！ 怪獣の角はトカゲの尾のような再生をし、またギラスピンを使うに違いない」

「しかし…」

「一つだけ勝つ方法がある、スピンにはスピンだ！ 見ろ」

回したコマを回転させた杖で真つ二つにするダン。

「奴らを破る手はこれだ！」

ゲンはきりもみキックを覚えるため、訓練を開始した。

スポーツクラブの体育館内で装置を作り猛にぐるぐる回してもらう。

一方、MACはマグマ星人の襲来に備え、日本全土のパトロールを強化し、迎撃体勢をしいた。

マッキー2号には赤石、白川、青島、桃井が乗っている。

マッキー3号も横に飛んでいる。地上のマックロディーには黒田が乗っている。

MAC本部でも黄色い服の作業員が忙しく動き回っている。

ゲンは百子のことを考えると気が気ではなかった。百子の元へ走るゲン。しかし、ダンに止められる。

「どこへ行くんだ!？」

「百子さんが……」

「きりもみキックはどうした？」

「それは……」

「練習を続けるんだ」

「しかし百子さんが！」

「続けろっ！」

海岸でダンが見守る中、きりもみキックの特訓に励むゲン。

「ていつ！ えいつ！」

「もう一度！」

「はいっ！ ……やあっ！ えいつ！」

岩にキックが命中！

「隊長！ やりました！」

「今のは岩を割ったのではない。欠けたにすぎない。見ている！  
でやあっ！」

手にした杖で岩を真つ二つにするダン。

「杖でさえ割る事が出来る。いいか、余計な事を考えるな。岩を割ることが出来るまで、どんなことがあっても練習をやめるな！」

「はいっ！」

その頃マグマ星人は双子怪獣を率いて、再び東京湾から日本列島沈没を図って上陸を開始した。

ダン隊長の言葉どおり、双子怪獣の頭の角が再生している。

マッキー2号が怪獣上空に飛んでくる。

「東京湾に怪獣発見！」

M A C基地のダン。

「直ちに攻撃！ マッキー全機に告ぐ！ 東京湾の怪獣に、一斉攻撃を開始せよ！」

「了解！ 分離！」

マッキー2号は分離して、それぞれ攻撃を始めた。マッキー3号でダンも駆けつける。

しかし、赤石、白川の乗る2号の上部がレッドギラスの角からの赤い光線で落とされてしまう。

マグマ星人と二大怪獣の前にMACはひとたまりもない。予期していたこととはいえ、モロボシ隊長はあせった。

何とかして時間を稼ごう、そう思えば思うほど怪獣は傍若無人に暴れまわった。

やがて、青島、桃井の乗る2号下部もブラックギラスの光線によって落とされてしまった。

（ゲン、何をしているんだ。時間がない、時間が……）

その時、ウルトラマンレオが現れ、圧倒的な強さで双子怪獣を追い詰めるが、マグマ星人の乱入によって双子怪獣がスピンをはじめてしまう。

レオは再び人間達に被害を及ぼさぬよう、海へ怪獣を誘った。しかしそれは、海に慣れた双子怪獣相手にはとても危険な事である。

マグマ星人と戦いつつも、双子怪獣に攻撃をしかけるレオ。

しかし、やがてレオのカラータイマーは赤く点滅を始めた。

やがてレオは海の中に沈んでしまう。怪訝そうな顔で海面を凝視するマグマ星人。だがその時、レオは海面に浮上し、高く飛び上がった。

そして上空で回転しながら赤くエネルギーを集中させた足で双子怪獣の首を同時に跳ね飛ばす。

倒れて海へ消えてゆく双子怪獣。それを見て慌てて黄色い煙と共に逃げ去るマグマ星人。

レオは、空へと飛んでいった。

変身を解いたゲンが一番最初に向かったのは百子の下だった。

「百子さんは……？」

「……………」

何も答えない大村。

ゲンはいたたまれなくなつて海岸に走つていった。

「死なないでくれ！……死なないでくれえっ！」

その時、レオマスクが唸つた。その時、奇跡が起こつた。

島が戻つた、百子の命と共に。島も今よみがえつた。

海岸の岩場でゲンと百子が黒潮島を見ている。

「おおとりさん、ありがとう」

「えっ？」

「あの島を見て。島が元に戻つたわ。そしてM A Cに入ったあなたが私の命を助けてくれたんだわ」

「……いや、僕のせいで君にケガをさせてしまつたんだ」

ゲンの言葉に百子は首を横に振る。

「私はあなたに助けられた夢をみたのよ。……だから信じたいの」

「百子さん……」

そこにカオルとダンが来る。

海岸の岩場でゲンとダン。

「ゲン、見る。お前のために太陽が昇っている。この大自然を星人から守つたんだ」

「僕が？」

「そうだ、君がだ」

ゲンはモロボシ ダンと輝く太陽に勇気付けられた。

しかし悪辣なマグマ星人はいつ、どこからまた地球を狙ってくるかもしれない。

レオとマグマ星人の戦いは、今始まつたばかりである。

## 6・涙よ さよなら……

夜のスポーツセンター。

カオルの兄のトオルがゲンに雲梯うんていの指導を受けている。

カオル、百子、猛、大村、そしてトオルとカオルの父が見守る中、トオルは雲梯を披露するが、父の声に気が散ってしまったのか途中で失敗して落ちてしまう。

ゲンが父に「静かにして下さい」と注意を促し、再挑戦。

トオルはそれで何とか成功させることが出来た。

それを見て父は自分のことのように喜ぶ。

その後、帰路に就く親子の背中を見て。

「うらやましいほど仲のいい親子ね」

「お父さんも大変だ、亡くなったお母さんの代わりもやってるんだな」

親子が仲良く歌を歌いながら帰っている途中。尋常じゃない猫の唸り声が闇の中から聞こえる。

「お父さん、怖い」

「お父さんがいるから大丈夫だよ。さあ、行こう」

再び歌を歌って歩き始める三人。だがその時、フェンスの上に怪しい人影が降り立った。

そしてその一瞬の後、その人影は突然父に襲い掛かった。

「うわああああっ！」

次の瞬間、父の身体は押していた自転車ごと真つ二つになり、二人は自転車の下敷きになる。

人影は歩いてきてトオルの前にプレートを置いて飛び去っていく。

「お父さん！」

トオルは自転車を跳ね除け、父の死体に駆け寄るのだった。

スポーツセンターの窓が叩かれる。大村がカーテンを開けるとトオルとカオルの梅田兄妹が。

玄関にまわる大村だが、何も言わない二人を前にゲンを呼ぶ。

「どうしたんだ？ トオル君……。どうしたんだ？ お父さんは……」

そこまで言ってゲンは気づく。

「……そうか！ お父さんに何かあったんだね！？ そうだろ！」  
トオルは重い口を開く。

「おおとりさん……。父さんが……。父さんが殺されたんだ！」

二人は堰<sup>せき</sup>を切ったように泣き出してしまった。

「トオル君！ 詳しく話すんだ！」

ゲンがさらに詳しいことを聞くとトオルはポケットの中からプレートを出し、地面に投げつけた。

「こいつが……。こいつが父さんを殺したんだ！ ……ちくしょう！」  
トオルに踏みつけられているその青いプレートにはある者の顔が模<sup>も</sup>られていた。その者とは……。

（……ウルトラマンレオ！？ ……何だこれは……）

「とにかく警察に連絡しなくちゃ！ 中に入って、中に入って」  
三人はスポーツセンターの中に入っていく。ゲンは一人そのプレートを握り締めるのだった。

犯人の落としたウルトラマンレオの意味するものは何か？

それはゲンにとって予期せぬ恐ろしい事件の始まりであった。

三日後の夜、降りしきる雨の中、ゲンは鈴木隊員とトオル兄妹を訪ねたのだが……。大村は独身のため料理が出来ずに梅田兄妹とは折り合いが悪いのだという。

猛の方は弟がいるから梅田兄妹は引き取れないと言う。

「おおとりさんが私のところがいいって言っんですけどね」

そんな感じで話し合っていると、鈴木隊員がふと思いついたように言った。

「そうか、ねえどうだろう、僕の家に来ては」

「鈴木隊員の家へ？」

「うん、うちには女房も居るし、それにとっても子供好きだから喜ぶと思うよ。ああ、おおとり君も泊まりに来るといい」

「しかし、鈴木隊員にまで迷惑をかけては……」

「なっ、おおとりさんも来てくれるならいいだろ？」

「うん」

こうしてトオルとカオル兄妹は鈴木隊員に引き取られることとなった。

鈴木隊員とトオルとカオルがマックカーで自宅に向かう帰り道……。

突然、前にあの人影が飛び出してくる。鈴木隊員はドアを開けて外の様子を見る。

「あっ！？　なんだこりゃ！　……あっ、うわあっ！」

次の瞬間には鈴木隊員はドアもろとも真つ二つに。

人影は再び死体の前にプレートを置き飛び去っていく。

パトカーのサイレンが鳴り響く中、MACは鈴木隊員の殺害現場の検証を行う。

「おおとり……」

「あの兄妹を見て下さい……あの兄妹や鈴木さんの奥さんのことを考えるといてもたってもいられませんよ！　……この仇はきつと俺がとってやる！」

怒りに燃えるゲンの前にダン隊長が現れる。

「隊長！」

「ちよつと来い」

ゲンはダンと共に誰も居ない所へ移動した。

ダンは鈴木隊員のそばに落ちていたプレートをゲンに渡して言う。

「宇宙金属だ」

「宇宙金属？」

「そうだ」

「じゃあ、この事件は宇宙人！」

「レオの名を騙って地球を侵略しようとしている挑戦状だ」

「くそう……敵はまだこの近くに！」

走り出そうとするゲンを杖で制するダン。

「慌てるな！ 今頃こんなところに居るもんか。……それより車を見たか、ドアが真つ二つだ。容易ならざる技を持つ相手だ。正体はつきりするまで追ってはならん」

「しかしそのためにまた人が！」

「私に考えがある、いいと言うまで絶対に手を出すな」

そう言うと言件現場に戻っていくダン。ゲンは手の中のプレートを握り締めるのだった。

MAC基地。

黒田が「じゃあ、明日の朝までよろしく頼む」と青島、赤石に言った。

「了解！」

二人はドアを出て行く。

「じゃあ、俺達はベッドで一眠りだ。なっ、おおとり」

「はい」

ゲンはヘルメットを置いたところでダン隊長の不在に気づく。

「隊長は？」

「さっきまでそこで地図を調べてましたがちよつと出かけてくると



言って……ついさつき」

「こんな時間に？」

「ええ……」

「これでもう三日目なんです。毎晩、夜になると出かけていくんです。隊長、どうしたんでしょうかしら」

「毎晩？」

ゲンはデスクに広げられている地図を慌てて見る。五つ×で印がしてある。

「1番、2番、3番、4番……これは昨日の現場じゃないか！」

連続殺人事件に人々はおびえ人影の絶えた深夜の街に、敵の正体を探る杖の音が響いていた。

ダンの鋭い目は闇に潜む黒い影を待っていた……。

歩くダン隊長の後、ガードレールの向こう側から忍び寄る人影。

その人影は突然、ダン隊長の前に跳んで来ていきなり両手の刃物で斬りつけた。

間一髪それをかわすダン隊長だが標識が真つ二つに。

星人の刃に対しダン隊長はとつさに杖で応戦する。

ガードレールも、ダン隊長が投げた金属の棒のようなものも切り裂かれてしまった。

そこにゲンが駆けつける。

「隊長！」

しかしダン隊長は「ゲン、どけ！」と、ゲンの頭を杖で殴って気絶させた。

そして杖を星人の顔面めがけて投げつけた。

杖は目に見事命中し、苦しむ星人は退散する。

スポーツセンターの自分の部屋で目覚めるゲン。

ゲンは起き上がり、空手の指導を受けているトオルを見つめるダ  
ンの元に向かう。

「隊長！ ひどいじゃありませんか！」

「何だ」

「隊長のピンチを助けようとした俺を殴るなんて！」

「分かん奴だな、ああしなかったらお前は死んでいたんだ」

「そんな！」

「私の言いつけを無視して何故そう死に急ぐ！？」

……奴はツルク星人、自分の両腕を刃物に変えている。まともに  
戦ったら勝てる相手ではない」

「しかし隊長はどうやって！？」

「何とか追い払うことは出来たが、この次は分かん」

ダン隊長はそう言うのとトオルに視線を移す。

「ゲン、あの子の目を見る……。……。あの子はかつてお前が自分の  
星を全滅させられた時の気持ちと同じだ。あの子の事を思うなら慎  
重に行動をしろ！」

そこでM A Cから連絡が入る。ダンは腕のM A Cシーバーで通信  
をする。

「モロボシだ」

「東京B X方面に宇宙人が現れました！」

「よし、ただちに出勤！」

「隊長！」

「ツルク星人だ！」

東京の街を襲う怪獣形態に巨大化したツルク星人。

M A Cはマッキー1号、2号、3号、ファントム、マックロディ  
で応戦。

ゲンはマッキー3号に搭乗。

「よし、俺がやる！」

攻撃をしかけるがほとんど効果はなく、ファントムが落とされてしまう。

「……くっそあっ！」

マッキー1号のコクピット内。ダンと赤石、桃井と白川が乗っている。

「全機引き上げだ！」

「隊長！」

「引き上げだ」

「はい、全機に告ぐ！退却せよ！」

MAC基地。

「隊長！一体市民は何と言ってるか知っていますか！？」

「分かっている」

「腰抜けだの卑怯者だのと言われて悔しくないんですか！？ 幸い星人も引き上げたからいいようなものの……」

「黒田、全機のスピードを倍にするようにエンジンをチェンジしてくれ」

「はい！ 赤石行くぞ！」

「はい！」

「他の者は次の出動に備えて待機だ」

隊員は全員退席し、ダンとゲンの二人だけに。

「隊長！ 隊長にはトオル君兄妹や残された鈴木隊員の奥さんの悲しみが分からないんですか！」

「悲しみか……」

「僕達、宇宙人にだって涙があります！」

「ゲン、私はお前の涙など見たくはない。今や事態は甘くないんだ。MAC全機のスピードを倍にしたところで星人に勝てるはずはない。大事な隊員のためだ」

「隊長……」

「星人に勝つ方法はただ一つしかない……ウルトラマンレオだ」

「それじゃ、あの時でも！」

「慌てるな！……今のお前の技では勝てない。タベ、私が何故お前の頭を打ったか分かるか？ 左右の手刀てがたなが二段攻撃でお前の首を狙っていたんだ！」

「二段攻撃？」

「その技に勝つ手は一つだ……これからお前はそれを覚えるんだ」

林の中で瓦やレンガを拳で割る稽古着姿のゲン。

「一つの技には一つの技で勝てる。だが、二段攻撃には三段攻撃しかない！」

言うが早くゲンに向かって杖を振り上げるダン隊長。ゲンは何とか避けていくが腹に一撃受けてしまう。

「これが奴の三段攻撃だ」

気づくとゲンの黒帯が外れている。

「避けていては奴には勝てん。二段攻撃をかわして、更に攻撃しなければならん。絶対に避けてはいかん。相手の左右攻撃は自分の左右で防ぐんだ。残る一つの攻撃は……足だ！」

「はい！」

ゲンはゴムを足に結び付けてキックの特訓を開始した。

「いいか、自分の命は自分で守らねばならん。しかしそのために多くの命を犠牲にすることは許されん。ゲン、お前は必ず勝たねばならんだ」

「はい！」

MAC基地。溶けたウルトラアイを見つめるダン隊長。

ダンは悔しかった。

マグマ星人との戦いに敗れさえしなければゲンにこれほどの苦し

みを負わせる事もなかったのだ。

その時、階段から足音が聞こえてくる。ダン隊長は慌てて懷にウルトラアイを隠す。

「隊長！ エンジンのチェンジが完了しました」

「ご苦労。君も出動に備えて待機したまえ」

「はい」

（彼らはまだ私を信じている…… エンジンをチェンジすることで勝てると思っている……）

ゲンは木を敵の手刀に見立てその攻撃を受ける修行をしていた。

ゲンの特訓は続いた。敵の二段攻撃に勝つ技は何か。

ゲンの心は焦った。焦れば焦るほど無駄な努力は続いた。

そして、ゲンとダンの恐れる時がやってきた。

MAC基地。

レーダーに反応が。

「東京BX105地区に星人発見！」

モニターを凝視するダン隊長の前に勇ましく並ぶMAC隊員達。

「隊長！ 準備完了です！」

ダン隊長は隊員達の顔を見て勝ち目のない戦いに隊員達を追いやることに躊躇したかに見えたが、やがて決心したかのようにこう言った。

「出動！」

東京都市部。

ツルク星人が街を破壊する。ビルを蹴り倒し、両手の刃でビルを真つ二つに。

それを迎撃するM A C。マッキー2号、3号、そしてファントムが出動する。しかし奮闘空しく刃を受けてファントムが火花を吹いた。パイロットの隊員の断末魔と共に墜落するファントム。それを見たゲンは技が完成していないのにとうとう変身してしまう。「レオ！」

トオルとカオル、百子と猛は星人と対峙するレオの姿を見上げていた。

レオは得意の格闘で立ち向かうがツルク星人の刃の前に成す術がない。やがて、胸のカラータイマーが赤く点滅を始める。

ウルトラマンレオの命は地球では二分四十秒。

しかし今、レオの命はあと数秒となってしまった。

レオは……レオは一体どうなるのか！？

ツルク星人の刃を受けて海の中に倒れこんでしまうレオ。

そして……胸のカラータイマーの点滅が、止まった。

## 7・男と男の誓い（前書き）

深夜、東京の街で次々と起きた奇怪な事件。

人間が真つ二つにされ、必ずウルトラマンレオの彫られた金属片が落ちていく。

トオルとカオル兄妹の父親が殺され、ついにM A Cの隊員さえも、  
ダンはそのツルク星人の仕業だと見破ったのだが、星人を倒す  
には三段攻撃しかない。とゲンに特訓を命じ、しかしその特訓の最中、  
巨大化して現れた星人の前に東京は全滅するかに見えた。たまらず  
ゲンはウルトラマンレオに変身した。だが……。

## 7・男と男の誓い

海中に沈んだウルトラマンレオは浮き上がって来ない。その様子を見ているトオルは叫ぶ。

「あつ！ ウルトラマンレオが！ …… くっそうっ！ カオル！ 父さんを殺したのはあいつなんだ！」

「じゃあウルトラマンレオじゃなかったのね！」

マッキー3号に乗っているダン隊長。

「むざむざ負けてなるものか…… 見てろ！」

ダン隊長はマッキーの下部からミサイルを出し、三連射する。

そして、電線を発見すると「よし、あれだ！」と誘導しツルク星人に切らせ電気ショックを与える。

苦しむ星人にトオルは言う。

「いいぞ！ 死んでしまえ！ 父さんの仇だ！」

だが、星人はそのまま撤退してしまう。

夕暮れの海岸でゲンを探すダンやトオル達。しかし、それが夜になっても見つからない。

「どう？」

「ううん」

「お姉ちゃん、もう私歩けない……」

「しっかりして」

「もう三時か…… 君達の気持ちも分かるけど出来る限りのことはやっただ…… 帰ろう」

しかしトオルはその場に座り込んで言う。

「嫌だ！ 僕は帰らない！ おおとりさんは生きてるかもしれないじゃないか！」

「僕だってそう思いたい、しかしな……」



「僕の周りの人がみんないなくなるなんて……僕は……僕は……」  
トオルの最後の方の声は涙声になってしまふ。その様子を見て  
猛はトオルの肩に手を置き、言った。  
「もう一度だけ捜してみよう」

MAC基地。

「隊長、明るくなり次第パトロールを強化します」

「ごくろうさん、まもなく出発か。星人は必ずまた来る。厳重にやれ」

「はい」

白川隊員、退席してダン一人になる。

ダン隊長はデスクの白い花を見つめる。

ダンは失った右足と変身能力に代わって自分の手となり足となり  
一緒に命をかけて戦ってくれたただ一人の男、ゲンのことを思うと  
たまらなかった。

（今度、奴が現れたら……私が死ぬ番だ）

ダン隊長の脳裏にゲンとの思い出が蘇る。

『僕の故郷はこの地球です。地球の人たちはみんな僕の友達なんだ』

『私にとっても同じだ。ゲン、二人でこの大地を守ろう』

『はい！』

二人の楽しい笑い声がこだまする。

（ゲン……）

その時、外部から通信が入る。

「はい、こちらMAC本部。……ゲンが生きてたんですね！ わかりました！ すぐ伺います！」

受話器を置いた時「あいつ……」などどつぶやくものの嬉しそう  
だ。

スポーツセンターのゲンの部屋。一同が看病をしている。  
杖の音にゲンは目を覚ます。

「……隊長だ！」

「隊長さんはまだよ」

「ほら、きこえるじゃないか！」

「ほんとだ」

杖の音が近づいてきて、やがてドアが開く。そしてそこにはダン  
隊長が。

「隊長！」

「ゲン、私と一緒に来るんだ」

「隊長さん、おおとりさんはまだ無理です。もうしばらくの間……」

「いや、大丈夫です」

百子はダンにゲンの手を握らせて言う。

「見てください、まだこんなに冷たい手をしています」

ダンはその手をはねのけるようにして言った。

「ゲンの身体の事は私が一番わかってるつもりです。そんなものに温くなる方法があります。ゲン、来るんだ！」

「隊長さん、おおとりさんは死ぬところだったんだぞ！」

「そうよ、ひどい！」

熱く見つめ合うゲンとダン。やがてゲンが勢い良く起き上がった！  
「稽古着を持ってくるんだ！」

ゲンは決意を固めたように顔の包帯を一気に引き剥がした。

ダンとゲン、二人は滝の前に来ていた。

「何故変身した？……何故変身したと聞いているんだ！」

「M A C が全滅しそうだったんですよ！」

「余計な事をするな！ M A C には私がいるんだ！ 何故私の命令を聞かない！？」

「……………」

「星人がもうすぐ戻ってくる。今度は電気ショックなど通用しないだろう。この貴重な時間をお前は無駄に過ごしてしまったんだ！何かというとウルトラマンレオに変身するお前の心を許せない！変身する前に必要なことをお前は忘れている」

「変身前にすること？」

「技の完成だ！ この滝を斬れ！」

「えっ？ この水を？」

「やるんだ、お前なら出来る。この水を奴の手刀だと思え」

その時、MACから通信が入る。

「モロボシだ」

「隊長、東京JR地区に星人が現れました！」

「了解、すぐ行く！ ……いいか、どんな事があってもその技を覚えるまでは来るな！」

「MACは！？」

「余計なことを考えるな！ 早く練習しろ！」

「はい！」

東京の街で暴れまわるツルク星人。

MACはマッキー2号、3号、マックロディで迎え撃つ。

「分離！」

「了解！」

マッキー2号、分離してフォーメーション。

しかし、苦戦し電車が刃を受け止まってしまうなど街にも被害が及ぶ。

マックロディーから下りて街の現状を見た赤石隊員がダン隊長に通信を入れる。

「隊長！ このままでは街は全滅です！」

「住民を避難させとけ。人命の被害を最小限にいとめるんだ」

赤石隊員はマックガンで応戦しながら逃げ遅れた住民達を避難さ

せる。

そんな中、トオルはツルク星人に向かっていく。

「ちくしょう！ あいつが父さんも鈴木さんもウルトラマンレオも殺してしまっただんだ！」

追いついた猛がトオルをつかまえる。

「トオル君！ 逃げるんだ！」

「いやだ！ あいつをやつつけるんだ！」

ツルク星人が二人に迫り来る。マッキー3号に搭乗しているダン隊長は、「二人が危ない！」と、最後の切り札、ウルトラ念力の体勢に入る。

ダンが腕を目の前で交差させ拳を握りしめ、念じると目が赤く光る。

そして星人はその赤い念波で包まれ、動きを封じられたまらずに退散する。

ウルトラ念力で全精力を使い果たしたダンは薄れた意識の中で、敵に向かうゲンの姿に最後の望みを託している。ウルトラ念力では敵を倒すことは出来ないのだ。

滝を斬る特訓の最中のゲン。

しかし、どうしてもうまくいかない。

「俺には出来ない……俺には出来ない！」

その時、ゲンに向けて杖が投げられた。それをかわし飛んできた方向を見るとそこにはダン隊長が。

「隊長！」

「その顔は何だ！？ その目は何だ！？ その涙は何だ！？ ゲン、俺は……」

精神に限界が来て立っていらなくなったダンにゲンは駆け寄る。  
「隊長！ またウルトラ念力を……あれを使うと命が縮むんでしょ

！？ やめて下さい！！」

「バカヤロー！」

ダン隊長はゲンの顔面を殴り飛ばす。

「人のことはどうでもいい、貴様は何故俺に言われたことをやらん！？」

「俺には出来ない！」

「お前がやらずに誰がやる！？ お前の涙で奴が倒せるか！ この地球が救えるか！ みんな必死に生きてるのにくじける自分を恥ずかしいと思わんか！ やるんだ！ もう一度やるんだ！」

そこでM A Cから通信が入る。

「東京J R地区に星人が現れました！」

「よし、すぐ行く！ ……ゲン！ 川の流れは絶えることなく終わりのないものだ！ 流れを目で見えなければ水を斬ることは出来ない。いいか！ 流れに目標を見つけるんだ！」

「流れに目標…」

「そうだ！ 早く掴んでくれ！ それまで私が星人を食い止めておく！」

ツルク星人が暴れまわる東京の街。

マッキー2号、3号、マックロディーが出動。

マッキー3号には青島隊員が乗り、ミサイルを撃ち込むが足止めにもならない。

ツルク星人VSダン隊長。

マックロディーから降り、マックガンで立ち向かうダン隊長だが、ツルク星人には通用しない。

ツルク星人の刃が迫る。ダン隊長絶体絶命。

一方、特訓を続けるゲン。脳裏にダン隊長の声がふと蘇る。

（川の流れは絶えることなく終わりのないものだ！ いいか！ 流れに目標を見つけるんだ！）

見ると滝の水に混じって散った桜の花びらが流れている。

「これだ！ 桜の花びらだ！ 流れに目標があつたぞ！ いやあつ！  
！ であつ！……！」

とうとうゲンは滝の水を斬る事に成功したのだ。  
技を習得したゲンはすぐさまレオに変身する。

「レオ！」

レオの登場をトオルとカオルも見守っていた。

「お兄ちゃん、またウルトラマンレオよ！」

「うん、レオは怒っているんだ！」

星人との格闘。

三段攻撃をマスターしたレオの前にはツルク星人の刃は恐るるに  
足りなかった。

レオは全身を赤く発光させ、そのエネルギーを腕に集め、腕を硬  
化させた。

そしてその両腕で刃をガードすると蹴りをくらわせ、手刀で相手  
の両腕を斬り飛ばし更に顔面にキック。

倒れたツルク星人の胸に腕の刃物が落ちて来て刺さる。

残忍な通り魔ツルク星人は今まで何人も命を奪ってきた自らの  
刃で絶命したのだ。

こうしてレオはようやく勝利を収める事が出来た。

百子がゲンに、「それで今度アパートを移ってトオル君とカオル  
ちゃんと一緒に住むことになったんです。遊びに来て下さいね」と、  
言う。

「うん、ありがとう……よかったな」

「うん、もう寂しくないわ」

「今度お兄ちゃんも遊びに行くからね」

「本当？」

「約束よ？」

車の前で待っている猛が呼びかける。

「おーい、行くよー」

「待ってー、すぐ行くわ。……じゃあまた明日。失礼します」

「さようならー」

三人は車の方に向かっていった。

ダンと言う。

「お前が彼らに喜びを与えたんだ。……行こうか」

「はい！」

舞う桜の中、二人の男の後ろ姿が遠くに消えて行く。ようやく平和が戻ったのだ。

## 8・泣くな！お前は男の子！（前書き）

恐るべき怪獣カネドラスの攻撃を前にゲンの苦悩は深まる。

父なきトオルへの愛か、カネドラスとの対決か、壮絶なる空中戦にMACの危機は迫る！

急げ、レオ！ 地球を守るのは誰だ！ さあ、みんなで読もう！



## 8・泣くな！お前は男の子！

この日、城南スポーツセンターのメンバー達は相模原ピクニックランドへ行った。

しかし、父を失ったばかりのトオルは他の仲の良い親子を見るのが苦痛でさえある。

目的地に着いた一同はそれぞれ乗馬したり、縄跳びをしたり、バドミントンをしたりと楽しんでいた。

その中にはこんな親子連れもいた。

「お母さんありがとう！」

笑顔でカーネーションを渡す子ども。

「あら、母の日は明後日よ？」

「だってカーネーションが枯れちゃうんだもん」

「はははっ、プレゼントの先渡しか」

その様子を影から見ているトオル。

カオルが近づいて呼んでも応えない。

その様子に気付いた百子とゲンも来る。

「カオルちゃん」

「お姉ちゃん！」

「トオル君、向こうで縄跳びして遊ぼう」

「さあ、私達も入りましょ。私はカオルちゃんのお母さんよ」

「よし！ 僕はトオル君のお父さんだ！」

だが、トオルはそこから動こうとしない。

「どうしたんだ……？」

「……僕だけの？」

「ん？」

「僕だけのお父さん？」

「……ああ、そうだよ。さあ、行こう！」

その言葉を聞いてはじめてトオルの顔に笑顔が戻った。

これから遊ぼうとした時、マックシーバーが鳴った。

「はい、こちらおとり！ 本部どうぞ！」

「エリア30に怪獣です！ 至急本部に向かって下さい！」

「ゲン、すぐ戻るんだ！」

「了解！」

「おとり君、すぐ行きなさい」

「はい……」 その様子を見てトオルは走り出す。

「トオルくんっ！」

それを追うゲン、百子、カオル、大村。

「トオルちゃん…… おとりさんはね……」

「分かってるよ！ おとりさんはMACの隊員！ 僕の父さんなんじゃない！」

「お兄ちゃん、無理言っちゃいけないわ」

「……………」

「あとは私に任せなさい。MACに急ぐんだ。さあ！」

無理矢理に後ろ暗さを吹っ切るために、走り出すゲン。

（許してくれ！ トオル君！）

その後姿にトオルの鋭い視線が刺さる。

（お兄ちゃんのばか！ お兄ちゃんの嘘つき！）

MAC基地から飛び立つマッキー2号と3号。

マッキー2号にはダンと黒田隊員が、3号には赤石隊員が乗っている。

怪獣カネドラスが街で暴れている。マッキーは攻撃を開始する。

善戦するMACだが、怪獣は頭の刃を飛ばし、両方とも撃墜してしまう。

だが、怪獣も消耗したらしく空へ飛び立った。

MAC基地。

「それは感傷だ。なるほどトオルに対するお前の気持ちはよく分かる。しかしお前が遅れたために何百人ものトオルが出来たかもしれないのだ！」

「……………」

その後ろで桃井、白川隊員が怪獣の行方を搜索していた。

「敵影、分かりました！ 怪獣は月の裏側です！」

「休憩してまた襲ってくるつもりだ。……聞いたとおり、再び怪獣は襲ってくる。お前は見なかったが容易な相手ではない」

「……………」

城南スポーツセンター。黒胴着のゲン。

その夜おとり ゲンは、ダンが考案し大村の作った奇妙な機械を相手に怪獣力ネドラスを攻略すべく特訓を開始した。それはゲンにとって、孤独な真夜中の特訓であった。

特訓は夜通し続き、やがて日がのぼり子供達が来る時間帯になった。

指導をする猛、跳び箱を飛ぶ子ども達。しかし、トオルは飛べない。

そんなトオルを複雑なまなざしで見つめるゲン。そこに杖の音が。どうした？」

「隊長……」

「こいつの攻略法はマスターできたか？」  
首を横に振るゲン。

「隊長！ こんな事して何になるんですか！」

「何になる！？ この美しい第二の故郷地球ふるさとを守ってみせると言った男の言葉か、それが！」

「隊長！ 僕がいうのは！ …… たった一人のみなしごに対して何もしてやれないのに地球だとか人類だとかいう…… 空しさの事なん

です……」

トオルを見ながら言うゲン。跳び箱は飛べない。

「トオル君、飛べるまでやるんだ！」

ダンはそのようなゲンに言い放つ。

「屁理屈はいい。こんな機械一つ攻め炙れていてどうするんだ！？」

その時、ダンのマックシーバーが鳴る。

「モロボシだ。……よし分かった。すぐ戻る。……遅かったな。怪獣が月を発ったそうさ。30分後には地球に着く」

「僕も行きます！」

「ここにいるんだ！ 身体で覚えこまなければならない事を口や頭を使って逃げ回るような事は足手まといだ！ まずこの機械を攻略してみる！」

ダンはその後來た大村に怪獣の事を話すと去っていった。

「何ですって！？ おーいみんな！ 早く帰るんだ！ 昨日の怪獣がまたおそつて来るみたいだぞー！」

帰る、というよりは逃げる子ども達。だが、トオルは逃げようとしな

ない。

「おい、トオル君、何やってるんだ！ 早く避難するんだ！」

「出来るまで続けるって言ったでしょ！？」

「お兄ちゃん、そんな事言ったらダメよ！ お兄ちゃん！」

だが、トオルは妹の説得でさえ耳を貸そうとはしない。

「猛、トオルは任せろ。早く避難するんだ！」

カオルを抱えて避難する猛。

「お兄ちゃん！ 逃げるのよ！ お兄ちゃんのばかりっ！ おにいちゃんーん！」

二人がドアの向こうに消え、ゲンとトオルの長い特訓がはじまった。

曇空を飛ぶマッキー2号と3号。マッキー2号にはダンと青島隊

員、3号機には赤石隊員。

「奴の着地予想点はエリア30だ」

「エリア30……3号機に告ぐ！怪獣の着地予想点はスポーツセンター近く！」

「了解！」

スポーツセンターで特訓する二人。

大村が来て二人に避難を促す。

「おい！ おおとり君！ 怪獣がこの近くに来るそうぞー！ トオル君！ 早く避難して避難！ おい！ トオル！ ……二人とも命令だ　っ！」

だが、二人は逃げようとしなない。

「ええいつ！　どうして言う事聞いてくれないんだ、もうっ！」

「ええええいつ！」

その時、機械の頭の刃物をゲンの蹴りがへし折った。

飛んでゆく刃物。その先には大村が。

「危ない　っ！」

だが、次の瞬間、大村は両手で刃を受け止めていた。

「大村さん、それは！？」

「昔剣道やってたんだ。しかしおかしいな、昔は何度稽古やっても取れなかったんだけど……これが真剣白羽取りって言っんだよ」

「真剣白羽取り……」

その頃、外では怪獣とMACとの戦いが始まっていた。

逃げようとした大村は外を見て気づく。

「ばかやる　っ！　俺なんか……俺なんか怪獣にやられて死んじまえばいいんだ　っ！」

「ばかあっ！」

ゲンはトオルの顔をはたく。

瞳を見交わす二人。

そこに大村が戻ってくる。

「大変だー！ トオルくん！ カオルちゃんが心配して戻ってきたぞー！」

「ええっ！？」

急いで外に走り出すトオル。

怪獣とMACが戦う爆煙の中を走るトオルとカオル。そしてそれを追うゲンと大村。

マッキー3号の赤石がそれに気づく。

「隊長！ おおとり隊員が！」

「攻撃中止！」

「了解！」

攻撃を止め、撤退してゆくMAC。

怪獣は炎を吐いてあたりを燃やし始める。大村は気絶してしまう。

トオルとカオルは炎の中、再会を果たす。

「カオル、ごめんよ」

トオルはカオルと共に近くの車に逃げ込む。

ゲンは二人の危機に変身する。

「レオ ツ！」

車を守るようにして戦うレオ。

ウルトラマンレオは車の中の幼いトオル、カオルの兄妹をその胸の中に庇いながら卑怯な怪獣カネドラスの攻撃に耐えた。がんばれレオ！ がんばれトオル、カオル！

身を挺して自分達を庇うレオ。トオルは心の中に父の声を聞いた。

（トオルはお父さんの子だろ？）

（うん……）

（ただそれだけかな。カオルのお兄さんじゃなかったのかなあ。お父さんがいなくて寂しいからといってそれを忘れてはしないかな）

（お父さん……）

（甘えたり、拗ねたりする前にカオルのお兄ちゃんだって事を思い出してみるんだよ）

「お父さん……」

「どうしたの？ お兄ちゃん」

「カオル、ごめんよ。もう心配なくていいよ。お兄ちゃんがついてるからね」

トオルはレオに呼びかける。

「ウルトラマンレオ……レオ ツ！ がんばれ っ！」

レオのカラータイマーは赤く点滅していたが立ち上がり、反撃を開始。格闘戦が始まった。

追い詰められた怪獣は頭の刃を飛ばしてきたがレオはそれを避けた。

二度目は真剣白羽取りで刃を逆に目に突き刺す。

レオは飛び上がると手にエネルギーを集中させ赤く光らせた。

そして怪獣を手刀で真つ二つ、必殺のハンドスライザーだ。

怪獣を倒したレオは空に飛んでいった。

その後、トオルはゲンとカオルが見守る中、跳び箱の訓練をしていた。

「よし！ もう一息だ！」

「お兄ちゃん、無理しちゃダメよ？」

「平気さ！」

「トオル！ 頑張れよ！」

「お兄ちゃん、捨て身でやれば何だって出来るってレオが教えてくれたって言うの。だから少し張り切りすぎているの。ごめんなさい」

ダンと大村も来て、皆の応援を受け、トオルは遂に飛ぶ事が出来たのだった。

## 9・男だ！燃えろ！（前書き）

謎のカーリー星人に恋人を殺された白戸隊員の悲しみは深く、そしてその責任の一端はゲンにも及んだ。

射撃と特訓に命をかける二人の若者。憎しみが激しく火花を散らして星人に挑む！

頑張れレオ！ さあ、皆で読もう！



## 9・男だ！燃える！

「すまないな、洋子さんを頼むよ」

「任しとけよ。無事お宅まで送るよ。それより急がないと会議が…」

「そうだな。ごめんよ洋子さん、ご両親によろしく。おおとり、頼むぞ」

「オーケー！」

この日M A Cの宇宙ステーションで働いている白土隊員が宇宙情報会議のため地球に戻ってきていた。

そして恋人の洋子とゲンと三人で久しぶりに地球での楽しい時を過ごした。

マックカーで洋子を送るゲン。

だが、バックミラーにカーリー星人の姿が。

ゲンは車を止めた。

「ちょっと待ってて」

車に洋子を置いて周りを探すがいない。

その時、車の方から悲鳴が。洋子が星人に襲われている。

応戦するゲン。とつさにドラム缶を投げつけ続けて格闘で倒すが星人は巨大化。

「洋子さん！ 逃げるんだ！」

逃げる洋子。だが星人は洋子の方へ。

「洋子さん！ 戻るんだ！」

しかし洋子はそのまま踏み潰されてしまう。

「洋子さーん！ くっそお！ レオ ツー……！」

ゲンはレオに変身する。

だが、いきなり肩の二本の角で突進され、ピンチに陥ってしまった。

星人相手にレオはなす術がなかった。

MAC基地。

白土隊員はゲンを殴り飛ばす。

白土「バカヤロー！ 無事に家まで送ると言ったのはおおとり、貴様だぞ！ MACのパトロール隊のメンバーはこの世で最強の人間達だ。その貴様がついていながら……何て事をしてくれたんだ！」

「……すまない」

「バカヤロー！ 俺は貴様になんか謝って欲しくない！ 洋子さんは帰って来やしないんだ。貴様になんか俺の気持ちがあつたまるものか」

「許してくれ……」

「うるさい！ 白々しい口を利かんでくれ！ 俺は貴様の顔なんか二度と見たくない！ それにあいつだ！ ウルトラマンレオもだ！」

「……！」

「星人にやられるばかりで手も足も出なかったというじゃないか！ 宇宙一の勇者が聞いて呆れるよ！ あいつに会う事が出来たら殴ってやりたい！」

「……………」

白土隊員はそのまま舌打ちをして行ってしまった。その直後、ダ  
ンが来る。

ゲンとダンが川辺に居た。

「お前が悲しむ事など一つもない。悲しむべきは白土隊員の方じゃないか。……何だその顔は？ 何が辛いんだ！ 辛いのは私の方だ。同じ宇宙人としてレオを責められ、不用意に変身したばかりか星人を倒す事も出来なかったではないか」

「しかし……」

「うるさい！ いいわけなんか聞きたくはない。白土隊員の悲しみを知れ。彼を見て自分の事をよく考えるんだ」

「……………」

MACの射撃場でマックガンで猛練習に励む白土隊員。

それを入り口からそつと見ているゲン。

そこに来たのは白川隊員だ。

「すごい人がパトロール隊に来ましたね」

「何だつて!？」

「あら、知らなかったんですか？ 白土隊員は志願して今日からパトロール隊に入隊したんですよ。どうしても星人を自分の手でやつけるんだつて張り切っていました」

ゲンは驚いた。悲しみに暮れているとばかり思った白土隊員がパトロール隊に志願入隊し激しく射撃訓練をしているではないか。そうだ、俺にもやる事がある。俺は星人を倒すために生きているのではないか。

真夜中、マックカーで走る白土隊員。そこで星人に襲われている女性の悲鳴が。

白土隊員はマックカーで星人に突っ込み、さらに降りてマックガンを連射。

「くそお！ こいつめっ！」

やがて弾が切れたので格闘戦に持ち込むが、星人は飛び上がって消えてしまう。

「ちくしょお……逃げられたか！」

MAC基地。

「奴は眉間が急所ですよ。それ以外の所には弾丸は効き目はありません。しかし、十分我々の倒す事の出来る相手です！ ですか

らこの辺を細かく区分し、隊員が張り込みをもって追い出しにできれば必ずやつつける事が出来ます」

「どうだ、白土隊員の意見は」

「しかしウルトラマンレオをやつつけた相手ですよ？」

「その辺なら大丈夫だ。タベ白土隊員は星人を倒しかけたばかりか女性を助ける事が出来た。余裕はある。冷静にやれば出来る」

「そうか、それじゃMACは自信を持ってもいいな！」

「そういう事だ。では担当地区を発表する。A地区黒田、B地区青島、C地区白川、D地区桃井、白土隊員は自由にしてくれ。君には狙撃の役目を頼むぞ」

「はい！」

「行動開始！」

「はい！」

出て行く隊員達。ダンとゲンが残る。

「隊長、今の作戦をやめて下さい」

「馬鹿な事を言うな」

「隊長！確かに眉間は急所だと思いますがカーリー星人が簡単に急所を見せるはずがありません！それに、隊員を単独で張り込ませる事も危険です。隊長、そんなに弱い相手ではありません！」

「思い上がるのもいい加減にしろ！皆星人を倒すのに一生懸命なんだ。あれがMACの隊員の使命だ」

「しかし、このままでは隊員の誰かが傷つく事は目に見えています！」

「地球人が地球を守るために命を懸けてるんだ。宇宙人のお前が何を言う。一体お前が星人を倒すためにどんな努力をしたというのだ。ウルトラマンレオは何をしたんだ」

「……僕だって人間を愛してます！地球を愛してます！地球は僕の故郷です」

「それならばウルトラマンレオのあのザマは何だ！？」

森の中、黒胴着で吊り下げた丸太相手に特訓をするゲンがいた。  
もちろん丸太を星人の肩の角に見立てての事だ。

大村、猛、百子が来て止める。

「止めないで下さい！ 離して下さい！ 僕は正気です！ 僕は今、自分のために技を覚えなさいといけないんです！ 分かって下さい！」

「こんな事までしなくちゃいけないのかMACの隊員は」

「そうです！ 地球を侵略する星人を倒すため、MACの隊員全員が命をかけて戦っているんです！ 分かって下さい！」

「そうか、本当に気をつけてくれよ。君にもしもの事があつたらクラブの子供達が悲しむからな」

「はい！」

道。黒田隊員がカーリー星人を追っている。

「星人発見！ 待て っ！」

黒田隊員は曲がり角を曲がったところで星人の姿を見失ってしまった。  
う。

「どこにいるんだ！？ 出てこーい！」

上から飛び降りてくる星人。マックガンで応戦するものの突進で倒されてしまう。

マックロディーで駆けつけて走ってくる青島隊員。

「黒田ー！ 大丈夫か！？」

逃げる星人。追う青島。

曲がり角を曲がった星人を追うようにして曲がる青島隊員だが、そこには星人が待ち構えていた。

「うわああああ！」

青島隊員の断末魔が辺りにこだました。

MAC基地。

「黒田と青島がやられたか……」

「やっぱりあの近くにいたんですね。畜生！俺がそこにいさえすれば！」

「……………」

大村、猛の協力を得て丸太特訓を再開するゲン。

野外射撃場でマックガンの二丁撃ちを特訓する白土隊員。

M A C 基地では通信が行われていた。

「はい、こちらM A C 本部」

「桃井隊員が星人に襲われました！」

「……………」

丸太特訓を続けるゲンの元に杖が投げられる。そう……、

「隊長！？」

杖による攻撃でたちまち追い詰められるゲン。

「お前はカーリー星人を倒すと言ったな！？」

「はい！」

「その腕ではまだ無理だ！白土隊員の射撃の腕の方が上だ！」

「そんな！」

「しかし……白土隊員の腕だけでも星人を倒す事は出来ん。お前は一体何をしてたんだ！」

ゲンを殴るダン。

「お前のしてた事は特訓なんかではない！あの丸太に……お前を憎しみ突き刺す心があるか！？」

黄色いジープでゲンを追い回すダン。

「逃げるな！逃げるんじゃない！そのまま向かって来い！」

「お願いします！ やめて下さい！ 隊長！」

「ゲン！ 車に向かって来い！ 向かってくるんだ！」

（ゲン、逃げるな。逃げるんじゃない！ 車に向かってくるんだ。カーリー星人に勝つにはこの方法しかないんだ。飛べ、ゲン。飛ぶんだ）

やがてゲンは向かってくるジープを飛び越える事が出来た。

その時、ゲンのマックシーバーに通信が。

「はい、こちらおとり！」

「東京A地区に星人が現れました！」

「何っ！？」

巨大化した星人が暴れ回っている。

そこに駆けつけた白土隊員。

「星人め！ 洋子さんの仇は俺がとつてやる！」

そう言う白土隊員は二丁のマックガンで攻撃を仕掛ける。かなり効いている。

そこに駆けつけるゲン。

「ジューン！ 待つんだー！ ジューン！」

苦し紛れに星人が壊したビルの瓦礫に襲われる白土隊員。

友のピンチにゲンは変身する。

「レオ ツ！」

「ウルトラマンレオ……！」

格闘で戦う。星人は角からビームを出して来たがジャンプで避ける事が出来た。

手刀で星人の角を切り飛ばして飛び上がり、そして眉間に角を刺すレオ。

倒れる星人。レオは勝ったのだ。

M A C 基地。

「洋子さんの仇はとった。宇宙ステーションに帰る。ウルトラマンレオの協力を得てな、俺の役目は終わった。まっ、お前もしっかりやるんだな」

そう言っ て部屋を後にする白土隊員。

「……………」

その時、ゲンの肩に手が置かれるがゲンはそれを振り払う。振り返るとそれは…………。

「隊長…………！」

「よくやったな。俺とお前はこの地球に住んでいるたった二人の宇宙人だ。命ある限り、この地球を守ろう」

「はい！」

その後、スポーツセンターでトオルやカオルや他の子ども達に空手を指導するゲンの姿があった。



## 10・美しい男の意地（前書き）

地球に芽生えた宇宙の美しい花。不思議な植物の正体は何か！？  
花を武器とする怪獣ケンドロスの陰謀に愛する心を守るために、  
我らがヒーローウルトラマンレオが立ち上がった。さあ、皆で読もう！

## 10・美しい男の意地

スポーツセンター前に落ちた何か。

それは太陽の光を受け、芽を出し、花を咲かせた。

カオルはその花を見つけた。

そこにゲンが来る。

「カオルちゃん ……!？」

ゲンは宇宙人としての超能力でこの花が地球の植物でない事を知った。

「捨てるんだカオルちゃん！ その花を捨てるんだ！」

「嫌！」

そこに百子も来る。

「どうしたの、おおとりさん？」

「おねえちゃん」

「その花を捨てさせるんだ！」

「何故？」

「何故って……」

言いよどむゲン。百子はカオルの持つ花をよく見る。

「珍しい花ねえ。綺麗だわ」

「私、お父さんとお母さんの写真の前に挿してあげようと思ったの」「そう、もういいのよ。行きなさい」

去ってゆくカオル。

「カオルちゃん！」

「おおとりさん」

「あの花は……！」

「珍しい花だわ」

「……毒かも知れない」

「あんなに綺麗で匂いもいい花が？ ふふふっ」

カオルのもとに走り出そうとするゲン。それを止める百子。

「おとりさんって本当にロマンチックじゃないわね。その上、女の子の気持ちも全然分らないんだわ」

「しかしあれは！」

「女の子は誰でも花は好きよ。だから毒なんてないって直感で分かるわ。道端の花にも目をとめるような優しさがなければいくら強くてもダメだと思うわ」

「……僕はただ……」

「私言いすぎたかしら？ ごめんなさい」

MAC基地にゲンとダン。

「バカモン！ 何故無理矢理にでもその花を取り上げ処分しなかったんだ！」

「宇宙からのものであるという事は分かります。しかしそれが必ずしも害があるかどうかははっきりしません」

「……ケンドロス星にある剣輪草けんりんそうに似ている」

「剣輪草？」

「成長しきると金属のように固くなるんだ。毒は無いがその花を武器に使う怪獣がいると聞いた事がある。とにかく処理するんだ」

「カオルちゃんが……両親の写真に供えた花をですか！？」

「地球のためだ」

「地球は守ります。しかし花の美しさや鳥のさえずりを楽しむような人間にもなりたいんです」

「命令だ」

「もし万一怪獣が来ても……花を使う前にやつつけてしまえば……」  
「命令だ！」

「……………」

熱い瞳を見交わす二人。

そこへ白川、桃井隊員が花束を持って来る。

「隊長、綺麗でしょ？」

「……………」

花束に一瞥するとダンはい放つ。

「ゲン、来るんだ」

ダンとゲンは誰も居ない所へ移動した。

「毒があるのは我々の方かもしれない。地球の子供が単純に美しいと見る草花も、我々が見ればその正体が見えてしまう。多少、嫌がられたり憎まれたりしても怪しいものをどんどん処理していくのが我々の使命だ」

「しかもそれで……女の子の優しい心を踏みにじるような事があってもですか……？」

「そうだ。そのくらいの事では女の子の優しさは無くなったりはせん。何も起こらんかもしれない。しかし何かが起きたら……取り返しつかない事になる」

夕暮れの道。カオルが身を寄せている百子のアパートへと走るゲン。

写真の前の花が不気味な光を発して回りだした。

そして部屋中を駆け巡り窓ガラスを割って外に出て帰ってきた百子とトオルとカオルを襲ったのだ。

何とかそれをやり過すが花は夕暮れの空を飛んでいった。花は遠くにいる怪獣が遠隔操作していたのだ。

それを見たゲンは叫ぶ。

「しまった！」

そして変身する。

「レオ　ッ！」

花を追って飛び立つレオ。

一方、MAC基地には通信が。

「こちらMAC本部」

「こちらマッキー3号怪獣を発見」

「場所は！？」

「東京B X 2 0 3地区です」

「よし分かった！」

レオの苦勞空しく、花は怪獸ケンドロスの手に渡ってしまふ。  
夕暮れの中、レオと怪獸との対決が始まった。

頭についた花を回して旋風を巻き起こし、指先から光弾を出し、  
花びらをブーメランのように飛ばす怪獸。

レオはとうとう当たってしまい、倒れてしまふ。

怪獸は花びらを茎に戻すと丸まってレオを下敷きにしてしまふ。  
そこで来たのがマツキー3号に乗ったダン。

「レオ……立て、立つんだ！」

ダンの援護射撃により、怪獸ケンドロスは撤退。

レオとマツキー3号も空に飛んでいった。

城南スポーツセンター。

百子とトオルとカオルがいる。

そこに満身創痍のゲンが帰ってくる。

だがゲンは倒れてしまった。

ゲンの部屋。百子とカオルがゲンの看病をしている。

「おおとりさん、あの花と戦ったんでしょ？」

「ごめんなさい、私がいう事をきかなかったものだから……」

「おおとりさん、ごめんなさい……」

「百子さんもカオルちゃんもちつとも悪くないんだよ」

「だって……！」

「花が悪いんじゃない、花を操っている怪獸が悪いんだ」

ゲンは起き上がるとマックスーツ、そしてマックジャケットに袖を通す。

「おおとりさん！ まだ寝てなきゃダメだわ」

「お医者様が言ってたわ。一週間はおとなしくしてるようにつて」

「大丈夫、大丈夫。こんなのかすり傷だよ」

「でも……」

「花を操る怪獣がいつまた出るかもしれないから。では、いってきます！」

「おおとりさん……」

ル「お兄ちゃん……」

「カオルちゃん、今度の休みには花をつみにいこうか。珍しい花をいっぱい」

「うん！」

ある場所に向かって走るマックカーにゲンとダン。

「私の恐れたとおりになった。レオが倒れた後、怪獣は東北に向かった。仙台地方に被害が続出している」

「申し訳ありません」

「総出動したMAC機も全部叩き落された」

「それは……」

「謝らんでもいい！ 言い訳もいらん」

「仙台へ飛びます！」

「怪獣は花と合体する前なら、MACでもやっつける事が出来た。しかし今は無理だ。今仙台に飛んで勝てるのか？ 飛んでくる花弁をどうする？ 自信はあるのか？」

「……………」

そして着いたのは以前ジープ特訓した砂地だった。

ダンはマックカーからブーメランを取り出した。

そして次々とゲンに向かって投げつける。

いくつかはじき落とすがあまりの激しさに倒れてしまうゲン。

「隊長！」

「男は外に出て戦わねばならん、何のためだ！ その後ろで女の子が優しく花を摘んでいられるようにしてやるためじゃないのか！？ 男まで女の子と一緒に家の中でままごとばかりしていたら一体どうなる！ 立て！」

再開される特訓。だがもはやゲンにブーメランを払う気力はない。そこにダンの怒声（いきどろ）が飛ぶ。

「意気地無し！」

「！？」

気づくとゲンは飛んでくるブーメランを手で掴んでいた。何かを閃いたか。

だが、その時ダンのマックシーバーに通信が。

「モロボシだ。……何！？ よし分かった、すぐ戻る」

「隊長！」

「ケンドロスだ。東京に向かっていて。二時間後には東京は襲われる！」

ダンはゲンを残しマックカーで戻っていった。

川辺。ゲンは猛と百子を相手にブーメラン特訓を再開していた。投げつけられるブーメラン。

「おおとりさん！ もうやめましょう！ 猛、もうやめて！」

「やめるな！ もっと投げろ！」

特訓は激しい物となった。その末にブーメラン攻略法を見出す事が出来たのだった。

その時、空からケンドロスが街に飛んでいった。

「よし！」

ゲンは走り出した。

街に降り立ったケンドロスは破壊活動始める。逃げる人々。

マッキー2号、3号が来る。2号には黒田と青島が、3号には赤石と桃井が乗っている。

「攻撃！」

「はい！」

ロケット弾で攻撃を仕掛けるが、ブーメラン攻撃を受け、機体は火に包まれてしまう。

「脱出！」

無事MAC隊員達はパラシュートで脱出する事が出来た。

なお破壊活動をやめない怪獣。

走って来たゲンは変身する。

「レオ　ッ！」

登場するレオ。

ケンドロスの両腕を引きちぎり、ロケット弾を封じ、飛んできた花びらも手刀で打ち落とし、自らブーメランとなる技・ボディーブーメランで茎を折って花を封じる。

激しさのあまりレオのカラータイマーは点滅していたが格闘の末、勝利する事が出来た。

それをMAC基地のモニターで見ていたダンの顔にも安堵の表情が浮かんだ。

後日、花畑で楽しむ百子とカオル、そしてゲンがいた。



## 11・必殺！怪獣仕掛人（前書き）

凶暴に暴れまわる怪獣ベキラに対し、MACは総力を結集したが効き目はなかった。

ダン是我心山の十貫を尋ねるようゲンに言い渡した。

果たして、十貫とは何者なのか！？ 急げゲン！ 急げレオ！

さあ、皆で読もう！

## 11・必殺！怪獣仕掛人

東京近郊に怪獣出現の報にてM A Cは直ちに出勤した。

大空を飛ぶマッキー2号と3号。2号には青島隊員とゲンが乗っている。

「嚴重なM A Cの警戒網を越えて忍び込む奴だ、用心してかかるう」  
「なあに、任しといて下さい。この特殊レーザーガンですぐしとめて見せますよ」

「攻撃の指揮は俺がとる。張り切るのはいいが勝手な事はするなよ？」

「はい！」

暴れる怪獣ベキラ。壊されるビル。逃げる人々。

マッキーは怪獣に攻撃を仕掛ける。だが、さして効果はない。

「……くっ！ ベキラの奴……！」

「くそっ！ ミサイルもナパームも効かないな。奥の手だ！」

マッキー2号の先端から特殊レーザーを出す。が、これも効果は薄い。

「特殊レーザーも効かない！」

「目を狙うんだ！」

「はいっ！」

するとかなり効いているようだ。

「よし！マッキー3号！ 目に集中攻撃！」

マッキー3号も先端から特殊レーザーを撃つ。

「今だ！ 撃ちまくれ！」

そこで光弾の集中攻撃。だが、マッキーが怪獣の口から放射される火花状熱線で落とされてしまう。

「おおとり！ 目だ！ 目に攻撃を続けるんだ！」

「はいっ！ ……あっ！」

その時、ゲンは地上に人が残っているのを発見する。

「あつ！ 青島隊員！ あれは！？」

「避難命令が出てこの地区には誰もいないはずだぞ。一人の不注意な者のためにみすみす大きな被害が出るのを黙ってみているわけにはいかん。何をしているんだ！ おおとり！ 撃つんだ！」

ゲンは攻撃を止め、ボタンを押そうとするが青島に止められる。

「止めるな！ それは脱出ボタンじゃないか！」

「あの人を助けてきます。避難させ終わったら攻撃して下さい！」

「待て！ 勝手な事は許さん！」

だが、青島隊員の制止空しくゲンはボタンを押して脱出した。

「くそうっ！ おおりの奴……！」

パラシュートで地上に降りたゲン。バケツを被っているその人は

……。

「もし！」

「わあっ！」

「大村さん……」

「ああ、おおとり君かあ……君もセンターの時と変わらないじゃないかな  
いか」

「何故こんな所にいるんですか？」

「コレだよ。パチンコだよ。またバカによく玉が出てな。夢中にな  
ってやってたらコレだろ？ 人っ子一人いないんだもん」

ゲンは大村を避難させる。

一方、青島隊員のマッキーも火花で撃墜されてしまう。

「ああっ！ 脱出だ！」

青島隊員は何とかパラシュートで脱出した。

「青島隊員！ くそお！」

ゲンはマックガンのビームで怪獣を後ろから撃つと怪獣は砂塵と  
共に消えていった。

「消えた！」

「そうか、奴の弱点は背中だったのか……」

MAC基地にゲン、青島、赤石、黒田、桃井、白川。

「おおとり！ お前の行動は明らかに命令違反だ！」

「おおとりは日頃スタンドプレイばかり狙いすぎるからな」

「そんな！」

「そんな事はないだ！？ なら何故命令を無視した！？」

「チームワークを乱すような奴とは一緒に戦えんぜ！」

「お前が余計な事をしなけりや2号機だつて落とされないで済んだんだ」

「しかし怪獣の弱点を……見つけることが出来ました」

「怪我の功名でな。しかし怪獣だつてバカじゃない。一度知られてしまった弱点をそう何回も俺たちの前に晒すかなあ？」

「……………」

「何だその顔は。これだけ言ってもわからんのか！ 自分が悪いとは思わんのか！ 立て！」

青島はゲンに掴みかかる。その時。

「青島！ やめろ！」

「隊長！」

「ゲン、一週間ばかり勤務を離れろ」

「隊長！？」

「冷静に自分の行動を反省するんだ」

「謹慎しろというんですか？」

「そうだ」

「何故です？ 何のために！？」

「まだそんな事を言っているのか！？」

「大村さんを見殺しにすればよかったんですか！？」

「命令違反の事を言っているんだ！」

「もついい！ それより怪獣はまた来る。その対策を急ぐんだ」

そう言ってダンは作戦室を出て行った。

「隊長！」

「おおとり！」

ゲンは肩に置かれた青島の手を振り払ってダンを追う。

「隊長！ 待って下さい！ 怪獣の弱点を知っているのは僕だけです！ 僕がいない間にもし怪獣が出たらどうするんですか！？ 隊長！」

「ゲン、自分がいなければMACは何も出来んというのか？ お前のその考えが他の隊員の神経に触っているのがわからんのか」

「しかし実際の問題としてあの怪獣を倒せるのは僕だけです！」

「友情やチームワークの事を考えろ」

「馴れ合いの友情やチームワークに何の価値があるん……」

「バカヤロ ツ！ 思いつかるのもいい加減にしろ！」

「隊長、友情やチームワークのために戦っているではありません。戦っている間に自然に沸いてくるのが友情やチームワークですよ！」

「……しかしお前は怪獣とは戦えん」

「何故です？」

「俺と一緒に来い！」

そう言ってダンがゲンを連れて行ったのは体育館のようなスペースだった。

「俺の背中を攻撃してみる。どうした！ ……青島の言った通り、おそらく怪獣は二度と背を見せない。さあ、どう攻撃するんだ？ お前でなければ退治出来ないんじゃないのか？」

何度も攻撃をしかけるものの、ことごとく返り討ちにされるゲン。倒れたゲンを尻目にダンは立ち去ろうとする。

「隊長！」

ゲンはダンの杖を掴んで止める。

「秩父の山奥に我心山がしんざんという山がある。その山の中に白雲庵はくうんあんという寺があつて十貫という坊さんがいる」

「十貫！？ ……隊長！」

「一週間の謹慎、確かに言い渡したぞ」  
「……………」

翌日、ゲンはバイクで白雲庵に出かける。

だが寺は留守のようで誰もいない。そこへ山伏風の老人が来る。

「こんにちは！ あのー、MACのモロボシ隊長に聞いて来たんですが、こちらに十貫という坊さんがいらっしやいますでしょうか？」

「ダンの奴、また厄介事を持ち込んできたな……………」

「は？」

「なーに独り言」

「あなたが十貫さんですか！」

「違いますよ。十貫は留守です」

「そう言つて老人は行つてしまふ。」

「あつ、ちよつと、待つて下さい！」

ゲンは老人を追う。

山道で子供がいる。子供は老人を見て言つ。

「十貫坊ー！」

「……………やっぱり……………！ 十貫さん！」

「わしは十貫ではないと言つたはずだぞ」

「しかしその子が……………！」

「本人がそうでないと言っているのに、そんな確かな事はないはずじゃ」

「待つて下さい！ お願いします！ お教え下さい！ 東京に出た怪獣を倒すにはどうしたらよろしいんでしょうか！？」

「怪獣？ そんな事はわしは知らんぞ」

ゲンの必死の土下座の頼み空しく、老人はゲンを踏みつけて行つてしまつた。

「……………！」

炭を作っている十貫と子ども。

ゲンは後ろからそつと近づいて十貫を木の棒で叩く。

「でえい！」

「うおっ！」

気づきもせずに当たる十貫。

「何するんだよー！ バカヤロー！」

「ほっとけほっとけ。その輩はココが少しおかしいんじゃないから」

「……………！」

後ろからの攻撃に何のヒントも見出せず、頭のおかしい人扱いされたゲンはそのまま山奥で空手の修行をする。

それを見た十貫と子どもは笑って行ってしまう。

「……………」

結局空手でも攻略法を見出せずにいたゲンはついてゆく事にした。その先で十貫は少年を抱えて崖を使い、三段飛びで川を渡る。

「これだ……！ これが出来れば……！ よーし！」

挑戦するが失敗してしまう。

「十貫さん！」

「うむ、放てば天に道じゃ。何事も雑念を捨てて肩から力を抜いてやってみなさい」

「はいっ！」

こうしてゲンの特訓がはじまった。

日が沈み朝が来て……とうとうゲンは三段とびをマスターする事が出来た。

「出来たなあ」

「はい！ ありがとうございます！」

「東京にな、何やら現れたそうな。早く行きなさい」

「怪獣がですか」

頷く十貫。

ゲンはバイクで山道を駆け下りていった。

MACは総動員で怪獣ベキラと戦っていた。

マッキー2号と3号が空に飛ぶ。マッキー2号には赤石と桃井が乗っている。

「攻撃！」

しかし火花熱線によって両機いっぺんに撃墜されてしまう。

地上ではマックカーとマックロディーがとまっている。

マックロディーで攻撃していた青島隊員がマック特殊銃を持って出てきて外にいるダンに言う。

「隊長！ やはり背中を攻撃しなければダメです！ 隊長達はここから攻撃を続けて下さい！ 奴が気を取られているうちに股の下をくぐって背後に行きます！」

「やめろ！ 危険すぎる！」

「しかし、このままでは全滅です！」

「青島！ 行くな！ 命令だ！」

「行かして下さい！！！」

青島はダンの制止を振り切ると怪獣に向かって走り出した。

「青島　っ！ ……援護射撃！ 撃て　っ！」

ダンはマックロディーで青島の援護を始める。

だが、地上を襲う火花で青島は倒れてしまう。

そこへ現れたのはバイクを駆ったゲンだった。

「隊長あー！」

「ゲン、十貫坊に会ったか？」

「はい！」

ゲンはそのままバイクで青島隊員を助けに行く。

「青島隊員！ 大丈夫ですか！？」

「おおとり……俺も命令違反しちゃったよ……」



ゲンは青島隊員を助け起こす。

「立てますか？」

「大丈夫だ、お前は？」

「奴の後ろに回ります！」

「おおとり……！」

「早く！」

「……頼むぞ」

青島隊員は自分のマックガンを腰から抜くとゲンに渡してゲンが乗っていたバイクで戦線を離脱する。

「青島、大丈夫か！？」

「大丈夫です！」

「黒田！ 救護急ぐんだ！」

「平気です！」

「いいから早くしろ！」

青島隊員は黒田隊員に連れられて車の方へ。

一方、ゲンは怪獣の後ろに回る事に成功する。しかし怪獣はゲンを押しつぶしにかかった。

そんなピンチの時、ゲンは変身する。

「レオ ツ！」

レオは怪獣に格闘戦を挑む。

火花を避け、エネルギー光球で弱らせる。長時間の格闘でカラータイマーは点滅を始める。

レオは三段飛びで後ろに回り、レオキックでとどめをさすのだった。

M A C 基地。ダンとゲンと青島。

「二人とも命令違反だ。青島は五日間勤務につく事を禁じる」

「すいません……」

「隊長！」

「謹慎の期間はまだ五日間残ってるな」

「はい……」

「スポーツセンターの方から矢の催促が来た。早く返してくれってな。……どうやら大村さん、忙しくてパチンコ行く暇もなくて悲鳴を上げているらしい」

「はいっ!」

「青島はすぐ怪我を治して来い。ゆっくり温泉でもつかってな」  
「ありがとうございます」

## 12・宇宙にかける友情の橋（前書き）

遊園地の怪獣ショーの中に本物のギロ星獣が紛れ込み、遊びに来ていたトオルと仲良しになった。

ギロを倒すべくMACが立ち上がった。しかし何も破壊しないギロに対しゲンは迷う。

どうしたゲン！ 急げレオ！ さあ、皆で読もう！

## 12・宇宙にかける友情の橋

遊園地。ゲンと百子、カオル、そしてトオル。

この日、ゲンは久しぶりの休日を楽しんでいた。MAC隊員として緊張した毎日を送っている彼は、今一時休務によって平和な雰囲気浸っていたのである。

トオルは一人先に行き、怪獣ショーを見ていた。

その中に紛れているギロ星獣。トオルと目を合わせた。

星獣の目が光る。会話が催眠術かトオルと星獣は分かり合った。

ギロはトオルに向かってジェスチャーをする。

「これ？はい」

トオルは手に持ったアイスギロに渡す。ギロはおいしそうにそれを食べる。

「うまいかい？ 君、何怪獣？ あつ、僕トオル！ 君の名前は？」

「ギロ！ ボクギロ！」

「ふーん、ギロか……君、そんなにアイスクリーム好きなの」

そこにゲン達が来る。

百子はアイスクリームを食べているギロに気づく。

「おおとりさん、あれ……あれはぬいぐるみかしら？」

「……………」

ゲンは宇宙人の超能力で見抜く。

「……怪獣だ！」

「トオルちゃん！ 離れなさい！」

「トオル危ないぞ、離れろ！」

ギロと分かり合ったトオルはギロの手を引いて走り出す。

「ギロ、逃げよう！」

「トオル！ 待つんだ！」

ゲンはその辺の車に乗り込み、トオルとギロを追う。

「トオル！ 離れろー！」

「おとりさーん！ 何でもないよー！ こいつはいい奴だよー！」  
「トオル！ 離れるんだー！」

「ダメだ！ やめろーっ！」

ゲンはギロに向かって車を突っ込ませる。

ギロは角から泡を出して車を動かなくした。車から放り出される  
ゲン。

いつの間にか巨大化したギロ。

遊園地は大パニック。逃げる人達。

「ただいま本物の怪獣が現れました！ 急いで避難して下さい！  
急いで下さい！」

ギロはゲンに泡で攻撃を仕掛け、トオルを手にもつ。

「お兄ちゃーん！」

ゲンは飛び上がって変身する！

「トオル！ ……レオ ッ！」

格闘戦を挑むレオ。

遊園地での対決は何かファンタジック。

レオがとび蹴りをしようとしたら、ギロは瞬間移動でどこかへ消  
えてしまった。

MAC基地。ゲンとダン。

「はつきりとした作戦もないままに変身する事は厳重に禁止してあ  
るはずだ！」

「いやしかし、今度の事件はトオルの命が！」

「その通り！ トオルの命がかかっていた。それでお前、人質を救  
う事が出来たのか？ ゲン、この俺が変身を禁止したのはこういう  
事態を恐れていたからだ！ お前が変身すれば怪獣も絶対に勝とう  
と思いはじめるんだ。ゲン、怪獣の手でトオルが宇宙に連れ出され  
たらどうなるか、お前はそこまで考えたのか？」

「……………」

マックロディーでパトロールするゲン。  
マックシーバーに連絡が。  
「星獣が現れました！ 場所はB地区105、昼間の遊園地です！  
各隊員は直ちに出勤、各隊員は直ちに出勤！」

深夜、メリーゴーランドで遊ぶトオルとギロ。その付近だけ、異世界のようだ。

MAC隊員達が走って来る。平山、青島、赤石、桃井。

「そこだっ！」

「待てっ！」

そこにゲンもマックロディーで駆けつける。

「隊長！」

「あれを見る」

「あれは……？」

「ギロの世界にいる」

トオルはMACの姿を見つけると言う。

「おい、MACの皆さん、こっちへきて一緒に遊びませんかー？」

「行け、ゲン。トオル君を離すんだ」

「はい」

ゲンはトオルのもとに歩み寄っていく。

「他の者は円形に解散。私が命令するまで攻撃するな」  
隊員達が「はい！」と返事。

「トオルー、わかるかい？ おおとりだ。僕も仲間にいてくれな  
いかなー？」

「おおとりさん！ おいでよー、楽しいよー。ギロはいいやつな  
んだー」

「よし、分かった。今行くからなー。その木馬を一度とめてくれないかなー？」

ゲンはマックガンに手をかけながら言う。

「ちよっと待っててー」

だんだんとメリーゴーランドが速度を落としてゆく。

「よし、今だ！」

ゲンをはじめとした、MAC隊員のマックガンの弾丸がギロを襲う。

「やめろ！ 撃つのはやめてくれ！ うわぁーっ！」

ギロは瞬間移動をして消え、トオルは木馬から落ちてしまう。ギロの世界も消えた。

「トオル！ しっかりしろ！ トオル！」

しかしトオルは目を覚まさない。

トオルの精神はギロの世界にいた。

「わぁーっ、すっげえー！ お菓子の国だぁー！」

病院。トオルは目を覚まさない。ゲンとダンがそばにいる。

「トオル。質問に答えてくれ。昼間、星獣と君はどこに隠れていたんだ？」

「ギロが笑っている……ふふふ……」

「……隊長、ギロ星獣の影響で脳がやられてしまったんじゃないでしょうか？」

「脳波の異常はない。脈拍数値も正常だそうだ」

「殺しちゃだめだ……ギロを殺しちゃだめだ……僕はギロと仲良く出来るんだよ……ギロはただ、アイスクリームやお菓子が好きだけなんだ……」

病室から出る二人。廊下にて。

「隊長……ギロ星獣は僕が変身しなければ何もしなかったし、何か特別な星獣じゃないでしょうか？」

「いや、今にきつと破壊を始める。ギロ星獣も決して例外ではない。奴の武器は二本の触手から出す白い液だ。その液を跳ね返すんだ！すぐ特訓に入れ！」

「しかし隊長！」

「星獣の犠牲者がここにいるんだ。相手は必ずまたやってくる。新しい犠牲者が出た時、お前は指をくわえて見ているのか？この地球は、お菓子で出来た夢の国ではないんだ！」

「……………」

病室で寝ているトオル。

「トオルクーン！ トオルクーン！」

「……ギロの声だ。ギロが僕を呼んでいる。呼んでいるんだ」  
トオルは目を覚ます。

「おい！ 僕だよー！ ギロー！」

気密室。泡まみれになって攻略法を見出そうとしているゲン。

「相手は液体だ。今のお前のスピードでは奴の吐く息には勝てん。奴の息は一瞬で固まる。そうなったらお前は助からん。固まる前にはじき返さなければならん。回転するスピードを上げるには空気の抵抗を出来るだけ少なくする事だ」

「空気の抵抗……そうか、身体を出来るだけ丸くすればいいんですね？」

「そうだ。円盤のように丸くする事だ。そして全身をバネにして遠心力で弾き飛ばすんだ！ いいか、星獣を倒す時間はほんの一瞬しかない。その一瞬が勝負だ」

「しかし隊長。そのギロ星獣はまだ地球を破壊していません」

「落ち着け！ 星獣を倒す事だけ考えればいいんだ！」

「隊長……………」



その時、部屋に百子が入ってくる。

「おおとりさん！ トオルちゃんが病院からいなくなっただんです！」

「何だつて！？」

「……ギロだ！ 奴に連れ出されたんだ」

MAC基地。ブザーが鳴り響く。

「こちらMAC本部。こちらMAC本部。リーダーが星獣をとらえました。場所は再びB地区105の遊園地です」

マッキー2号とマッキー3号が基地から飛び立つ。

ダンのマックロディーも地を駆け巨大化した星獣を迎え撃つ。

マッキー2号と3号が夜の闇の中、星獣を攻撃する。

星獣に乗ったトオルは叫ぶ。

「やめろー！ ちくちよー！ ギロが何をしたっていうんだー！」

「隊長！ 星獣が移動しました！ 場所はC地区302！ 激しく暴れています！ まだトオル君は救出出来ません」

「そうか、よし分かった！」

身体を丸める特訓中のゲン。

高く飛び上がり、猛回転をするゲン。すると泡が散ってシャボン玉になったのだ。

攻略法が出来た。

ゲンは体育館のような所に走っていき、変身する。

「レオ ッ！」

星獣の前にレオが飛んできて格闘戦を挑む。

「レオーっ！ やめてくれー！ レオーっ！」

ギロは泡で攻撃する。が、マッキー3号の援護で何とか抜け出し反撃する。

その拍子にトオルはギロの身体から弾き飛ばされてしまうがレオ

がキャッチして地上におく。

そしてレオが高く飛び回転すると辺りにシャボン玉が舞う。まるでお伽の世界のような雰囲気です。戦いが続く。

両手をクロスするようにして角を折って星獣を倒すレオ。

星獣は泡と共に小さくなり息絶えた。

ギロの亡骸にすぎたトオル。

そこにゲンやダン、カオルと百子、青島、赤石、平山、白川、桃井、そして大村が来る。

「トオル、泣くのはよせ。君だってM A Cの隊員の仕事の意味が分かってたはずじゃないか」

「分からないよ！ 隊長は、どんな怪獣だって全部敵だと思ってるじゃないか！」

「トオルちゃん……」

「ギロは地球じゃ何も悪い事はしなかった。攻撃をしたのはM A Cの方がいつも先だったじゃないか！ 僕はもうM A Cなんか要らない！ レオも要らないよおっ！」

「トオル、君は確かに星獣と仲良くできた。そして広い宇宙で平和に優しい怪獣がいる事を知った。それだけでも大発見じゃないか！ 我々大人もね、君から大事な事を教わったと思ってるんだよ」

「だけど、だけどギロは死んじゃったじゃないか！ やっぱ僕はギロと一緒に宇宙へ行けばよかったんだ！」

誰一人口を開くものはいなかった。

その時、ダンはゲンと目配せを言った。

「トオル君、私からのお願いだ。ギロを生き返らせたらM A Cを許してくれるか？」

「えっ？ 生き返る！？ 本当にギロは生き返るの！？」

「ただし一つだけ条件がある。たとえ生き返っても怪獣を地球に置く事は許されない。ギロ星獣には宇宙へ帰ってもらうが、いいか？」

ゲンは皆からひっそりと離れて崖の上から両手を広げて変身する。  
「レオ　ッ！」

そして目からリング状の不思議な光線、リライブ光線を当てて星獣の角を再生させた。

オルゴールのネジを巻いたが如く、ギロ星獣は生き返った。

トオルと握手をすると星獣はレオの手の中に。

そして輝き、テレパシーでレオと会話をする。

「ギロが笑った……おい！　降りてこーい！　おい！　もう一度僕と遊ぼ……」

「トオル君！　……私は君とギロ星獣の友情に打たれた。君は怪獣を愛し、怪獣もまた人間を愛する事を覚えた。トオル君、ギロにこの美しい気持ちを持って宇宙へ帰ってもらおうじゃないか」

「トオルちゃん、ギロにお別れを言うのよ」

「……。ギロー！　さようならー！　また来てねー！　ギロー！　さようならー！」

ギロを手に乗せたレオは飛び立ち、空へ消えていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0944p/>

---

ウルトラマンレオ

2011年4月1日12時10分発行